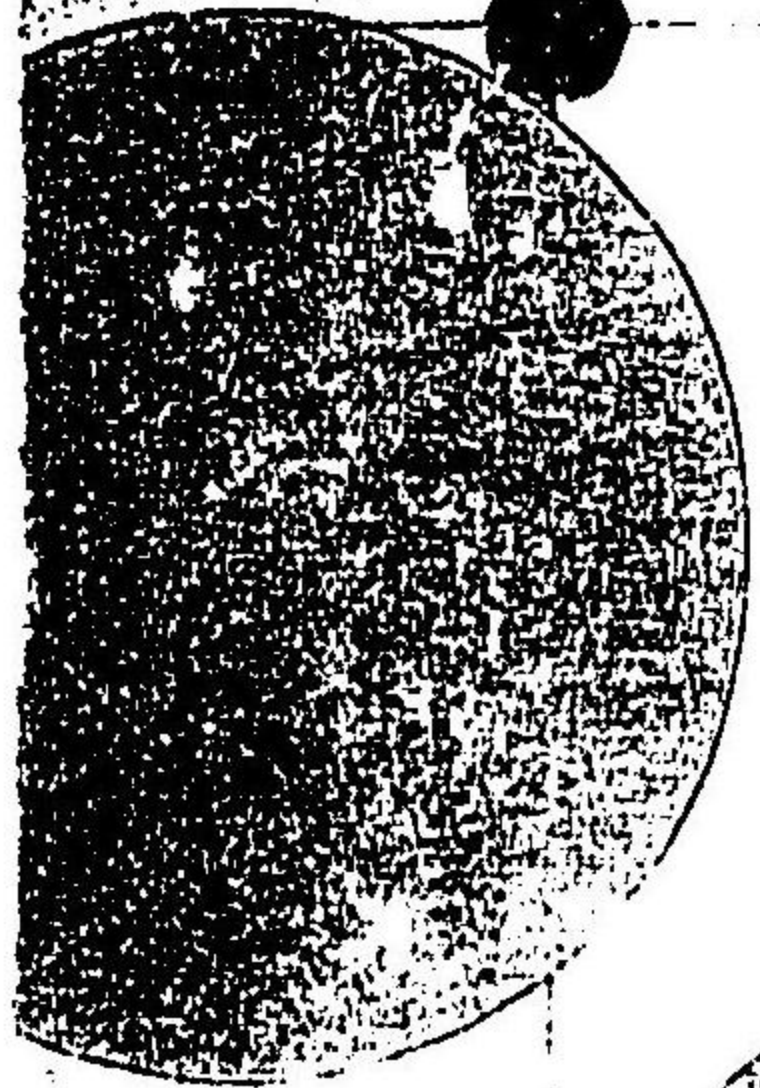


99

23

柳川葉著

川

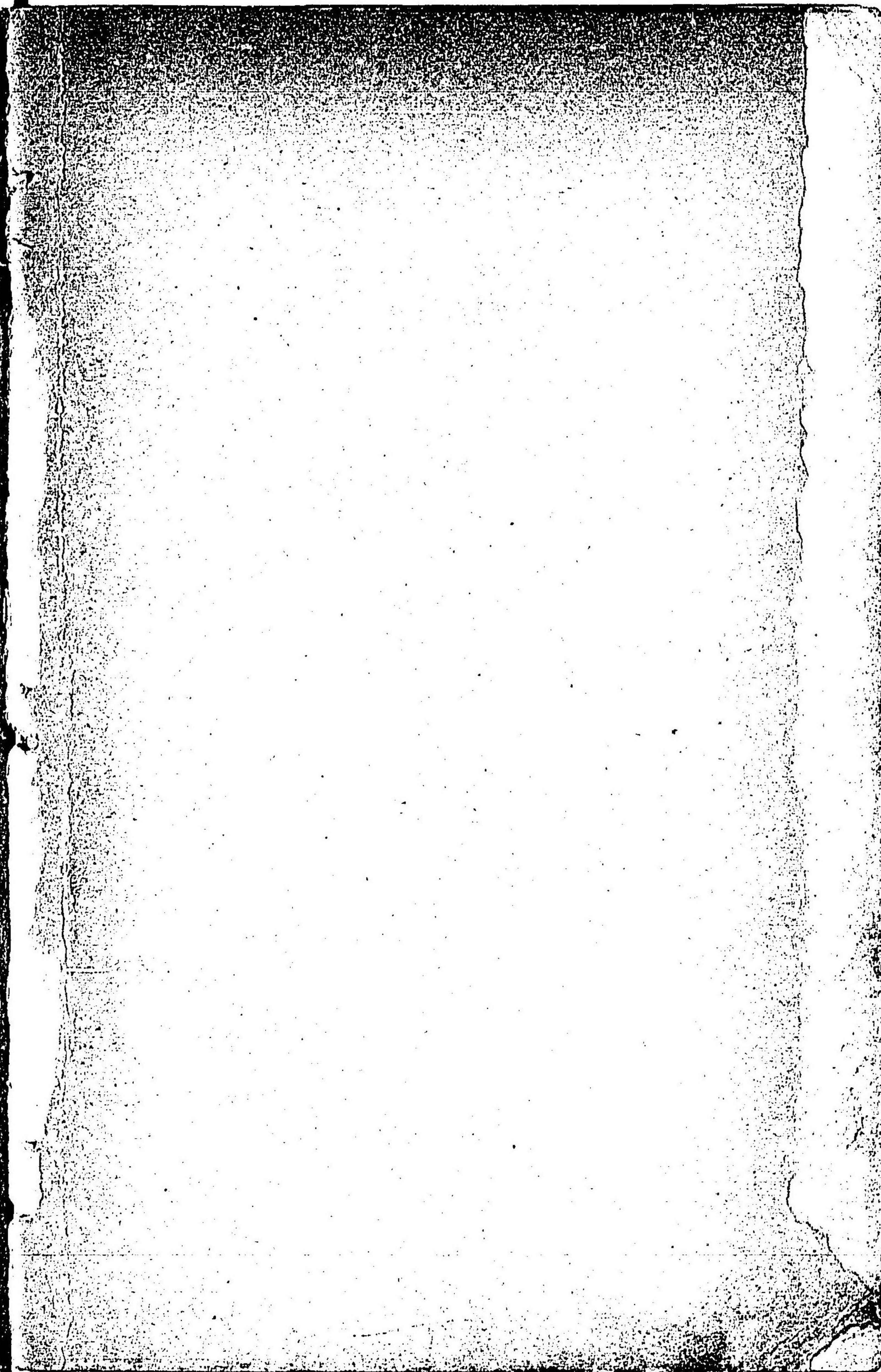




Handwritten vertical characters, possibly '川' (Kawa) or similar, written in a cursive style.

Handwritten vertical characters, possibly '川' (Kawa) or similar, written in a cursive style.

明治
38 4 21
内交



序

年頃書きさらせし短篇小品を取集めて、こたび梓に上せむと爲るにあたり、試みにこれを一閱すれば、自ら意に滿たぬものゝ多くして今更に我才の拙きをなげかるゝのみ。然るにても、是を省き彼を加へたらんには、少しはとゝのふ節も見えんなど、思はぬにもあらざりしが、或は紙数の多きに過ぎ、或はこゝに轉載する能はざるもありて、終にそれさへはなざりき。あはれ醜きは其まゝに見過したまへ、たゞ此中の一をだにいさゝかの興とも見られんには、著者が望は足るべきなり。散浮く花の姿も無き、いさゝ小川のあくた川。

目次

秋日和	二頁
歳の影	三頁
いとし子	五頁
鐘の音	六頁
籠の翠	七頁
小殿原	八頁
まのび音	八頁
貫の説	一〇頁
停車場	一〇頁
音 樂	一三頁
子の思	一三頁
影法師傳	一六頁
彼誰時	一七頁
吊活字文	一八頁
櫻關手	一九頁

乘合馬車
小學教師

三〇
二二





川

秋
白
和

柳川春葉

川

「四面海もて囲まれし、我敷島の秋津洲。」
と歌ひながら、眞先に向島百花園の門に驅込んだのは七歳ばかりの顔
の丸い男の子、當時流行のカーキ色の半穿の洋服に、緑の反つた麥葉の
帽子を冠つてゐる。

「母様疾くいらつしやいよ。」

「融さん其様に飛跳るものではありません。石にても蹴くとも怪我を爲
すすよ。」

(1) 年齢は二十五六にも成らうか、瘦形のすらりとした體に水色絹セルの單

衣を着て、白茶繻珍の帯を締め、髪は品の好い丸髷、細面の美しい夫人が、六十餘の女隠居に添うて静に歩を運ぶので。

「今日は日曜の爲か、大層人が出て居りますやうでございますね。」

「然様さ、ちや馬車等が待つて居るよ。融が又悪戯を爲ると危い。」

と云ひながら一行は廻て木戸の中へ入つた。秋も漸寒の九月中旬、紺碧の空は拭へる如く晴渡つて、軽い白雲が高い處を飛ぶ。地には昨日の雨を舍んで、千草八千草の花の美はしさ。折から午過の日光は静に照して

冷な風が絶へず秋の色を弄んでゐる。

融は陶器細工を並べた椽の前に立つてゐたか、二人を見ると大きな聲で、

「一寸是は何？」

「此方へいらつしやいよ。融さん、何故お前は那樣に言ふ事を聞かないの

です。」

「僕は見てゐるばかりなんだよ、彼處へ行つちやあ可けないの？」

行くのだよ。」

「可けなくはありませんが、彼處は歸途に寄ります。奥の方の休息所へ

見渡せば四阿の椽臺に幾群の客は憩ひ、或は露多き花を分けて園内を逍

遙する者もあつたが、何れも言合せたやうに唯物淋しく振舞うてゐるの

である。

「お母様も足勞れなすつたてございませう、此邊へ休みませうか。」

夫人は低聲で尋ねると、

「然うだねえ、見晴しの好さそうな處でも茶でも飲まうかね。」

廻て三人は花の中の四阿に入つた。

「母様僕は彼方の方が可いと思ふな。」

「勝手な事を云ひなされるね。此處が一番好うございます。」

「僕は彼の唐茄子のやうな物が實つてゐる處へ行きたいな。」

聲の上へ昇つたり降りたり。

「可けなくはありませんが、彼處は歸途に寄ります。奥の方の休息所へ
行くのだよ。」
「見渡せば四阿の椽臺に幾群の客は憩ひ、或は露多き花を分けて園内を逍
遙する者もあつたが、何れも言合せたやうに唯物淋しく振舞うてゐるの
である。」
「お母様も足勞れなすつたてございませう、此邊へ休みませうか。」
夫人は低聲で尋ねると、
「然うだねえ、見晴しの好さそうな處でも茶でも飲まうかね。」
廻て三人は花の中の四阿に入つた。
「母様僕は彼方の方が可いと思ふな。」
「勝手な事を云ひなされるね。此處が一番好うございます。」
「僕は彼の唐茄子のやうな物が實つてゐる處へ行きたいな。」
聲の上へ昇つたり降りたり。

融は

「融や、世話を焼かしたるなよ。今度の日曜には奥山の花屋敷へ連れて行つてあげるから。」

「眞實ですか祖母様、嘘ぢや無しの？」

「何でお前私が嘘を吐くものですが、祖母様が病氣の中お前が能く看病して呉れたつたから、其御禮に屹度連れて行きますぞ。」

「其時は母様も一緒にいらつしやるてしやう、僕淺草の花屋敷は大好きですよ。」

と自然木の柱へ摺つて廻りながら、

「いつか父様に連れを行つて戴いたさうだ……あ、今度も父様が一緒だと好いんだけれどねえ。」

二人の女は顔を見合せて、何やらうら淋しげに微笑んだ。隠居は茶椀を下に置いて、

「それは然うと能く咲き揃うた事。萩は少し遅いが、亂れた處に風情が

ありますね。」

「然様でございます、而して雁來紅の美しくも景色の宜しいものですこと。」

「雁來紅と云ふのは彼の采配のやうな草なの。」

「然うですよ。融さんお前其處に咲いて居る大きな花を御存知かえ。」

「是れ？ 知つてゐます、牡丹！」

「違ひますよ、是はね芙蓉といふ物。」

夫人は座を立たうとして、不圖横手を見ると、今しも小逕から現れた二人連の男女とハタと面を合せた。

「あや貴方は千代子様ではございませんか。」

紫甲斐絹の洋傘を持

つた、其の小柄の夫人は口を開く。

「邦子様、まあ！ 眞實にお久しぶりで御座いましたね。」

千代子も可懐しさうに云つたが、雙方とも連に氣を兼ねて、何うやら窮

屈らしい舉止。

「夫でもお見逸れ申しませんよ、貴方も能く覺えてゐらつしてね、最う七……八年もお目に懸りませんでしたもの。」

と言ながら、邦子と呼ばれた夫人は傍に立つ男の子に目を着け、

「此坊ちゃんはお貴方の……。」

「はい、貴方は初めて御覽なさいましたのですね。」

「まあ、お可愛い。——お幾歳にお成りなさいました。」

千代子は黙つて融の顔を見る。

「お幾歳？」

「六歳。」

と云つたまま融は隠居の方へ驅けて行く、

「御丈夫さうな、眞個に何時の間にか彼様御子様か……と申しては可笑しうございませぬ、七年もお目に懸らなさいのですから、其等てございませぬ。」

「ますわ。」

「貴方はお幾人て被在るの。」

「不運な事には未だ一人も持ちませんのですよ。」

連立つ紳士を振返つて、

「此方が能くお話を致します、私の學校のお友達で、今は勝山さんへお嫁さなすつた千代子様です。」

と云つて、少し躊躇ひながら、

「私の所夫でございます。」

口忠實に紹介はされて、千代子は漸く初對面の挨拶を済ますと、紳士は程好く傍路へ外れて、見え隠れに其處等を徘徊する。

「能く覺えて居りましたのね、私は自分ながら不思議だと存じますよ。」

「私だつて見忘れは致しませんよ。」

千代子は未だ姑に氣を置いて、餘り訝々しくは無い。

「然し貴女は以前より大分お痩せなさいましたのね。」

「年を取りましたのですもの。」

二人は相見て微に笑つた。

「然し邦子さん、貴方は何時も元気で、学校の時分から少しもお變りが
ありませんよ。」

「那樣お世辭を仰有ると嘘でも嬉しうございます。時に貴方はお一人、

……では無いのでしやう。」

「母と一緒に参りました。」

「あとお姑御様ですか。」

邦子は低聲で云つて隠居の方を見たが、間が離れて居る上に、丁度横を
向いて子供と話を爲てゐるので、其儘又低聲に成り、

「御主人様は御一緒にいらつしやらないのですか。」

「はい唯今戦地に参つて居ります。」

「然う〜私は全然忘れて居りました。成程戦地へ御出に成つて仰在る
のでしたね。お留守は無御心配でございしやう、眞に氣が着きませ
んでした、お見舞にあがるのでしたのに。」

「何う致しまして、然しお暇がございましたら是非お遊びにいらしつて
下さいます。」

「屹度伺ひますよ、私は身輕ですから。」

と一寸振返つて、

「長話を致しました。では近日悠りち邪魔に出ます、種々積るお話を致
しに。」

笑ひながら勿々に會釋して、邦子は夫の後を追うて行く、

「大層氣の輕さうな奥様だね。」

隠居は歸つて來た千代子に云ふと、

「何時も面白い人でございますよ。古くも友達なものですから……然

し長くお待たせ申しまして済みませんでした。」
「何有、お前。」と煙草入を帯の間へ納めて立上りながら「少と廻つて見ましやうかね。」

三人は又連れ立つて四阿を出たが、花の小徑を幾廻りして、應て遊沼の橋を越えやうとする時、行手から来る人を融は目慧くも見付けて、

「宇佐美の叔父さんが来た。」

隠居も千代子も等しく顔を揚げると、如何にも一個酒氣を帯びた人が嘴として其前に來かゝつた。

三十五六の、色の黒い、殿めしい八字髯を生した男で、黒絹の五つ紋の羽織を引被け、バナマの帽子を前下りに冠り、握太の洋杖を引摺つてゐる。

彼も融の聲に氣が着いて勢無く立留まつたが、

「ヤア是はち揃ひて、御散歩ですか。」

皺枯れた聲で云ひながら左手に帽子を脱る。隠居は苦々しげに其姿を打目成り、

「信郎、お前は何うしたのだね、又那樣に酔つて、他様に見つとも無いではありませんか。」

「見つとも無い？ 冗談云つては可けません、酔つたつて何も人に迷惑を懸けるでは無しさ、なあ融。」

「斯様な處へ酔つて来る人は無いではないか、而して晝日中から赤い顔を爲てる。」

宇佐美は平然として、

「何程叱られた處で花より外に知る人も無し、蝸の聲だと思へば腹も立たずか。は、は、は。」

「呆れたものです、私達は最う歸るのだから、何うとも勝手に爲なされるが可い、然し間違の無いやうに爲てお呉れ。」

隠居は匆々に行きかける。

「然うですか、此方も伯母さんには用が無いんだ、是はち千代さん。」
と叮嚀に挨拶して、

「過日はち邪魔を爲て、大きに御馳走に成りました。何ですか。」
と五六間行過ぎる隠居の後を見送り、

「最早全然快く成つたのですかな。」

「はい涼風が立ちましてから滅切りも快い方で、ち醫者も最う大丈夫だと申しますのでございますよ。」

「然うですか、快く成らんでも可いものを、まあ然し貴方も御心配が無く成つて何よりでした。時に彼方から音信が有りましたか。」

「一昨日も参りましたが、不相變壯健で居りますさうです。」

「壯健で！結構です、夫が第一だ。私は自分の事に取紛れて近來餘り音便も爲ませんでした。何れ近いうちには御宅へも出ます意です。」

千代子は又も思ひがけぬ人に捉まつて引留められるので、心は急ぐ氣は兼ねる、殆々當惑な有様を、隠居は知らぬものゝ如く遠く眺めてゐるのであつた。

「母様行きまじやう、僕は立つてゐるのは可厭ですよ。」

徐々融も難り初める。

「此隊長は大分氣が短いな。是から叔父さんと一行に行かんか。」

「可厭です。」

「是は御挨拶だな。那樣な事を云ふと、今度行く時に何にも土産を買つて行つてやらんぞ。」

「では、私共は急ぎますから是で御免を……。」

「然うですか、大きに失禮しました。又近日是非伺ひます。」

と同じ事を繰返して、

「何うか伯母さんに宜敷く云つて下さらう、近日又出ますから。」

叩き付けるやうに帽子を冠つて、洋杖を引きながら橋を渡つて行く。千代子はホッと息を吐いて融の手を取り、母の跡を追うたが、懸て一所にならぬと、

「祖母様何故先へ行くの、母様と僕は置いてけ堀に成つて了ふ。」

「彼様な奴はありはしません。」

「隠居は難しい顔を爲て、」

「お千代さん可い加減に置いて來なされば可いに、失禮千萬な。」

「常の通り酔つて在つしやるのですから。」

「其酔うが困るのです。途中で逢つて伯母に冗談を云ふ者が何處にあり

ますか、だから私は彼は嫌だと常から云つて居るのです。」

と少時無言で居たが、

「あゝ〜今日は折角保養に來たのに、初から一向面白く無い、早く歸りましやう、又此次にお絹でも誘つて一緒に來る事です。」

獨語のやうに云ふのを聞くと、今迄何やら必地快さうに爲てゐた千代子は、恰も電氣にても撃たれたやうに、他目にも知れる程萎れ返つて了つた。

「母様彼の陶器の處へ行つて見ないのですか。」

融も急に心淋しく成つて母の袖を曳くと、

「又此次にね、さあ穩しくなさいよ。」

「早暮かゝる花の中には、是も淋しい蟲が鳴く。」

中

昨日今日打續く秋日和の、萩に遅く、菊には未だ早い頃である、勝山の隠居は昨日からの前觸れて麴町の鳥居醫學士の家を訪ねた。

此家の内室は絹子と呼ぶ隠居の一人娘で、年は千代子に二歳年上。子供は三人まで有るが、性質は兄と共に父親譲りの極く快闊な、何方かと云

へば男らしい方で、口数は少い代り人情の深い、容貌も美しいと云ふ程には無いが、勝れて目許の涼しい婦人である。

今日も夫が病院へ出た留守なので、客間には二人差向ひ、絹子は二歳に成る未の子を抱いてゐると、其傍には土産物の菓子折や玩具品が置いてある。隠居は頻りに赤子を絞してゐたが、

「利雄は幼稚園へ入園つたかね。」

「はい先月でしたよ、體も最も大丈夫に成りましたから、夫に家へ置いて我儘を爲せるより學校へ入れた方が可うございますからね。」

「然うてしやう、彼の子は一體少し弱い方だから、幼稚園などは大層可うてしやう。今年は家の子は皆、丈夫だと云ふので何より安心したよ。」

「其代りお母様が悪かつたのですもの、随分心配しましたよ。」

子供が乳を搾すので、ゴムの乳首を宛行ひながら、

「眞個に姉さんなんぞは何の位心配してゐてなすつたか知れませんが、

兄様のお留守の間に萬一間違つても有つたら、如何にも手の届ないやうで申譯が無つて。」

嫁の事を云はれると、隠居は急に面白からぬ顔色を爲たが、

「鳥居さんにもお前にも種々面倒を懸けて濟みませんでしたよ、然しお蔭で此通り以前の體に成つたから、家に居ては反て邪魔にも成るだらうけれども……。」

絹子は不思議さうに一寸顔を揚げたが、強て質さうでも無く、

「何有私達は確な御介抱も爲やしませんが、姉様は嘸お骨が折れたてしやう、けれど其効が有つて此頃の御様子では、さつと喜んで御在るてしやうよ。」

「さあ、何れ夫が當然ですからね。」

益氣の向かぬ風でツイと横を向くの、絹子は又瞥と見上げたまゝ、困つたものだと言はぬばかり、黙つて俯いて了つた。

「何かえ、病院の方は近頃は忙しい方ですかい。」
「時候の變り目で、病人が多いさうです。其うちでも腸の病氣が一番多いとか云ひますよ。」

「然うでしやう。」 然も思ひ當る處のあるものゝ如く打領き「夫といふのが矢張食物に在るのです。私は以前から食物の事は難しいが、今度の病氣から餘計に入笠しく云ひますよ。兎角注意が足りんものだから、それも若い者なら何有生水位飲んだ處で、格別害にも成るまいが、心が弱つて居る老人は直に中りますわ。」

「けれどお母様のは何うだか知りませんが。」

「否、猶且其食中毒に違ひ無いのさ。私は丁と覺があるもの、賤しい食物の事などを兎や角云ふのは如何なものだけれど、夫はね。」
と物をしく顔を顰め、

「正が此地に居た頃は、何かに付けて大事に爲て呉れたのだけれど、當

節はなか／＼然うは行きません。私だつて斯う云ふ時節だから、決して贅澤を爲やうといふ了簡は毛程も有りは爲ません。何んな物でも厭ひは爲ないが、何うも萬事に……邪魔……と云ふても無からうが、まあ那樣取扱を爲れると、随分目を瞑つて通す氣でも、亦然うは行かなく成るではないか。」

冗々しく陳立てられて、絹子は頗る困却した體であつたが、然う／＼解

みを通させても居られぬと思つたので、
「夫は然うかも知れませんが。」
故意と濫々答へる。

「かも知れないではありません、お前には未だ解らないんだよ。斯んな事を云つたら世間に能く有る嫁姑の間柄で、私の僻見だと一概に然う思はれるだらうけれど。」

赤子が泣出したので話は途絶へる。絹子は乳母を呼んで其手に渡し、翫

具を宛行つて室を出してから、自分は身輕に少し膝を進め、

「ですがお母様愚痴では無いと仰有るけれど、夫が猶且貴方の愚痴なのですよ。萬事に全然貴方の思ふ通りに爲る事は誰だつて出来は致しません、私だつて此年月御一緒に居れば、何んなに一生懸命に働いた處で一つや半分……夫は事の行違もあるのは當りまへです。斯んな生意氣を申しては氣に障るか知れませんが、長い年月はお互に持ちつ持たれつて行くのですもの、貴方の仰有る位な愚痴は屹度姉様の方にだつて有まじやう。」

「何が前！」 隠居は目の色を變へる。

「否有りませとも、而し姉様に爲て見れば那樣事は何とも思はず、辛い事は辛抱して、唯貴方の氣持を悪く爲せまいとばかり思つてゐるてなさるのですよ。私には夫が能く見えて居ます。」

「妙な事が見えますね。お前には親の身は少とも見えなくて、他人の事

だど何から何まで解るのだね。」

苦り切つてハタ／＼と灰吹を叩く。

「其他人と仰有るのが悪いのですよ、お母様だつても嫁にいらした事が一度はあるのでしやう？」

「馬鹿にも爲て無。」

「ですから其時の事を考へたら解るでしやう。他人々々つて那樣に思はれたり云はれたら、嫁の身として何んなに辛いものだか。」

所謂男まじりの、誰にしる理屈の違つた事は其儘には通さぬ氣象は、絹子の殊に美しい處である。

「他人だと云ひは爲ません。」

「云はないでも思つて居らつしやるのでしやう。彼の方が兄様の處へお嫁に被入つたのは、今から數へれば七年も八年も前の事で、融と云ふ大事な孫まで有るのではありませんか、夫を假にも那樣事を云はれて、

「萬一私だつたら決して厭つては居ませんよ。」
「お前はち前で何うとも御勝手よ、お母様はち前の事を云ひに来たのでは無いから。」

絹子はなか／＼斯様論録では妻まぬ。

「私は眞實にも母様だから遠慮無く云ひますが、萬一此の家にも母様のやうな姑が在つたらば、私は疾に出て了つたてしやう。」

「ちやまあ、呆れ返つて物が云へません、私のやうな姑とは何といふ言話だらう。」

堪忍袋の緒が切れたやうに、母親は躍鬼と成つて、

「姑に爲ても悪いなら、實の親だつて憎からう、親が憎いと……。」

「まあ／＼然う仰有ると荒立ちますよ。醫論ですから。」

「醫論にしても餘りです。」

絹子はやゝ少時考へてゐるが、

「今仰有いましたね、姑でも實の親でも憎さは同じだらうつて。然うてすとも、嫁の身に取つては親も姑も違ひありません、大事に思ふ事も同じですよ。」

心の底から出る言に打たれて、今度は隠居の方が黙つて了ふ。

「能くお考へなすつて下さいまし。私は決して姉様の加勢を爲て、お母様を責めるのではありません、何の私は貴方の子ですもの、姉様に附く處か、大事のお母様を頼む人の事を迂り見ては居りません、七年も前から此荒ばかり見る女の目で、能く見て居るのです。然し姉さんには少しも缺點は有りません、缺點どころか、私は彼も是も一々感心する事ばかりで、ほんに蔭では涙を溢して御禮を云つてゐるので御座りますよ。」

「ち絹お前は爲う爲たのだぞ。」

「何うも致しません。」

と秘と涙を拭いて、

「ですから決してお母様も悪い方から御覧なさらずにね。夫は人間の事ですから、稀には面白く無い事も有りまじやうけれど、今迄も云つた通りです。何しろ貴方の爲にも二人と無い姉様の事ですし、融さんにも大事のお母様ですもの。」

「私も考へて見まじやうよ。」

隠居も胸の迫つたやうに云つて、

「成程、私が年効も無い、何事も至らないのだつた。」

「お母様お腹をお立てなすつちやあ困りますよ。」

「何の！ 腹を立てるところですか、何が有つても親子の中ですもの。」

今お前の通つた通り、夫に付けても子といふのはお前ばかりでは無い、嫁だつて猶且子だからね。」

「然うですとも。」

「夫に正が居なければ、留守を預るのは彼の人なんだからねえ。此方て隔を置くから、先方も自然に氣を置く、然う成ると少しの事もお互に邪推ばかり爲るやうに成つて、心で睨み合ふやうに成るのです。」
と又黙つて壁を見詰めてゐたが、

「氣に爲れば咳の爲やう一つでも癖に障るので……夫は知らなくても無かつたが、自分では未だ自分の事が解らないから。」

「誰だつて同じ事です。」

「あ、何も私が足りないからだ。戦地へ行つてゐる正の事を思へば、斯んな事どころでは無い、無事に歸つて来る時に家内揃つて喜んで出迎へて遣るのが何よりだね。」

「然うですとも、兄様も彼方へ歩いて成つてから、家内の中が穩に、何にも事が無いと聞くのが何より好い氣安めてしやうよ。」

と話のうちに玄關へ勇しく曳込む腕車の音が爲て、懸て廊下を踏鳴らし

ながら入つて来たのは鳥居醫學士であつた。彼は隠居の姿を見るより、
「ヤア是は能うこそ入つた。」

立つたまゝ、バナマの帽子と塵除外套を絹子に渡し、夏洋服の膝を窮屈さ
うに蹲みながら、
「明日あたり一寸伺はうかと思つてゐました。能うこそ……大分時
が好く成りましたな。」

「先達中は又種々御厄介に成りまして、お蔭様で此通り以前の達者に返
りました。」

「何より結構です、最早大丈夫御安心なさいませ。」
と云ひながら前に在るビスケットを一つ口に入れて、

「斯んな物を食はせるから困る、もつと好味の物でも御馳走してあげろ。」
「でも又體に障ると可けませんから。」

絹子が辯解の傍から隠居は口を出して、

「お蔭様で菓子も戴けるやうに成りましたのです。」

「困りますな、那樣他人行儀な事を仰有つては。」

不圖出た言ながら、他人行儀と聞くに付け、隠居は胸を貫かれたやうな
氣がして絹子と顔を見合せた。何にも知らぬ學士は急に手持無沙汰に成
つたので、不味さうに又一個赤い砂糖の付いたビスケットを口に投り込
み、
「あゝ不味い、不味い！」

下

御空を渡る鷹が音も、草葉に集く蟲の聲も、いとど身に沁む此秋を、千
代子は一人椽に端居して、夕を寒い秋風の思ふがまゝに吹かせてゐる。

木立、築山、泉水など常に變らぬ我家の庭ながら、見る者の心によつて
は自と趣も異なるやう、殊に淋しい此頃は、何一つとして遠い異國の風

荒き野に、戈を枕の夫の事を思ひ出さぬ日とは無いので。千代子は今も唯そればかり考へながら、呢と空を眺めてゐるうち、何時か家の中は薄暗く成つた。

小間使が燈火を置いて行つたと思ふと、直に慌しく引返して来て、

「奥様、宇佐美様がお入來に成りました。」

「然うかい、此方へお通し申すやうに。」

と命ずる間に、宇佐美は最う遠慮氣も無く座敷へ入つて来て、

「お一人限ですか、伯母様は？」

千代子は起つて座を改め、

「唯今願を連れてお湯にいらしやいました。」

「それで一人法師ですか、總是玉關情、何日平胡虜、良人能遠征のお察し申します。」

と一人で承知して、何か少し口籠つてゐたが、

「時に近來は何うですな、伯母は相も變らず口やかましいですか。」

餘り唐突なので、千代子は頓に答も出ぬ。

「例に依て例の如してしやうな。」

「否、此頃は一向何にも仰有いません。」

「然うてはありますまい。私は能く知つて居る。夫に私と伯母との仲は

貴方も御存知なんだから、何もお秘しなさる事は無いですよ。尤も斯

んな餘計なお世話を焼き度くは無いが、正様が出征の間際に呉々家内

の事を頼んで行かれたし、實は親類中でも種々氣を揉んでゐるので

貴方だから決して構はんが、此家の隠居と來た日には親戚中でも名の

通つた難かし家で、近頃こそ年を取つて少しは氣も折れたらうけれど、

以前は實に皆困り切つたものです。だから貴方も嘸お骨が折れるなら

う、同じ事でも正様が居れば、有弊に伯母だつて少しは遠慮も爲まし

やうが、今日は主人も居ず、貴方一人て家を治めて行くのだから、猶

の事御面倒も有りませう。

「不束者でございますから、何うも思ふやうに参りませんので。」

「否々貴方だから是で済んで居るのです。夫は何れも感心してゐるので、

實際勝山の親類は皆貴方に同情を寄せてゐるのです。お絹さんの如き

も常に心配して居る、先日一寸鳥居の家へ行つたら、頭から其話さ。

今日は常に引更へ宇代美が生真面目に成つたにつけ、千代子は耳の痒い

やうな氣が爲て段々に身を縮める。

「斯んな事を喋つてゐる最中に歸つて来て、立聴ても爲れては困るが、

まあ今と話し致したやうな譯ですから、無論他から云ふまでも無いけ

れど、何事も氣に懸けずに、貴方の體でも悪く爲んやうに、而して正

様の歸るのを待つて……、又其後は樂です。」

「種々御親切に難有うございます。皆様に御心配ばかりも懸け申します

のは皆私の至らないので、然う仰有つて下さると何と申して可いか

解りません位です。然し此頃は決して御心配に成るやうな事は無いの
てござりますよ。」

「ぢやあ何程か氣が折れたのですかな。」

宇佐美は腕組を爲ながら巻煙草を喫かす。

「實を申し上げると、此節は不思議な位母様が私達を大事に爲て下

ささりますのじ。」

「はてね。」

「以前は随分……薄々は御存知のやうな事もございまして、私は何う

爲たら可いか殆ど困り切りました事も有つたのですが、此頃は全然

お人でも變つた様に、私ばかりではございませぬ、奉公人へも、少し

も小言などは仰有らず、今では餘りも柔し過ると思ふ程ですよ。」

「事實ですか。」

千代子は莞爾とも爲すに、

「何て嘘を申しましたやう、斯んな事も貴方ですから申上るのでござりますよ。」

「夫は妙だ。自分で気が着いたのか、それとも鳥居へても行つて言はれて来たかな。」

成程那樣な事でも有つたのかと、千代子は過る日の事を考へて心の中の人知れず絹子に感謝してゐる。

「何にしても然う成れば結構、勝山の家は御運長久といふものです。」と云ふ處へ、庭口から融が號外を持つて飛込んで来た。

「號外、母様號外ですよ。」
と椽側へ上らうとして客の居るのに気が着き、

「號外。」

と小さな聲を爲て、極りの悪さうに母の傍へ差置き、

「叔父さんいらつしやう。」

「はい、御機嫌好う、時に號外は何ですか。」

千代子は我にもあらず驚喜して、

「あら遠陽の占領ですよ。」

「遠陽占領？ こいつは萬歳だ。」

と宇佐美が大きな聲を爲たので、表口から歸つて来た隠居も目を丸く爲て室の内へ入り、

「何れ！ 読んで聞かせて下さい。」

宇佐美が讀むのを一同息を凝して聞いてゐたが、

「何うだらう、正は大丈夫だらうかね。」

「大丈夫、々々々、屹度大丈夫ですよ。」

「ではお祝にも酒でも持つて参りませう。」

千代子が怡々爲るので、隠居も何時か釣込まれ、

「其方なら信郎は何時でも可からうね。」

「無論、殊に遼陽占領の祝に此方の心祝も兼ねているのだ。サア融、萬歳を稱へるんだ。」

「萬歳！」

「然うだ。伯母さんもお稱へなさい、お千代さんも奥でやるが可い。僕も是から……ヨウ萬歳！」

大いに萬歳を稱へる。伯母さん、お千代さん、奥でやるが可い。僕も是から……ヨウ萬歳！

秋　日　和　終

歳　の　景

鷓鴣かず、東白まず、天には星の影残り、地には行く年浪の漂へり。今大晦日の夜と共に去らんとする一歳送るに、怪しむべき哉、我目の前を、雲の如く煙の如く過ぐるものあり。風の急に之を吹けば、西に向ひ去ること飛ぶに似たり。あはれ何の者ぞ。過行く年の影なりと言ふ聲して、眞先なるが進み來ぬ。姿耀くばかりに喜満てる面白して、足拍子をかしく舞ふは、屠蘇の酔にやあらん。手には骨牌を持ちたるが、如何に樂しからずや、吾世は幸なりと謳ふと見えて、搔消す如くに去りぬ。次なるは栲葉色なる獲服を具ひて、逸物の黄犬を引き、帽に挿みし梅花を取りて、此色香の清きを見よと言ふまゝに、はや第三なるは現れぬ。船に乗りて盃を擧げつゝ、行く雁やとばかり浪に隨ひて去る所を知らず。

次なるは太く酔ひしれたるが、百眼掛けて遣らしくと叫びては走る。さては葛蒲提る者、御輿を昇く者、燈籠持つ者、柿食ふ者、枝の紅葉を肩に爲る者引續き、やがて外套着たる人の寒しくと水漬障りつゝ過ぐれば、はたくと餅搗く音に促れて悄々と歩み來る者あり。衣は長途の風雨に破れけりや、其狀魚の腸などを掛けたる如く、寒蘆の影、冷灰の面、餘命も乏しと憔悴せるは、懷裏に剖心の愁劍を抱くにあらざるなきか。餘りの可傷さに立寄りて、君は如何に爲たると問へば、面も擧げて、之を見給へと言ふなる彼が掌の上には、不思議や數萬の軍兵入亂れて、盛に奮撃突戦するなり。君に問ふ、這は抑も何等の摸樣ぞ。曰く、吾が一年の戦なり。此旗色の危く何れも重創を負へるは樂の勢、此の揉みに揉んでぞ進むは苦の軍なり。我は今此勝敗を見んとす。儲も物好きな君かな可思しの戦や、疾く打遣り給へと勸むれども、彼は首を掉りて、如何て打遣るべき、這は吾心の内に住むものなればと言ふ。異し、

君が心に斯ばかりの物を包みてなど生くるを得る。彼は嘲笑ひて、爾言ふ人こそ心得ね、誰も誰も己の胸の中を見よ、一年の間に幾時か此合戦の鎮るべき。或ひは樂の軍勝ち或は苦の旗進み、勝敗常に定無ければ、樂の勝つ時には即ち喜び、苦の勝つ時は即ち悲し、人の哀歎も亦定無し。君は喜ばざるや、又悲まざるや。見よ我前に過ぎ行きし者は皆儚ら一時の勝に誇りて、此苦を忘れたる者なり。君は爾爲ざりしや、其をしも幸なりと爲ざりしや、吁、遮莫今は唯獨り遅れたる我を憐め。我は今愆して此勝負を見る者とはなりぬ。其の勝つも負るも與り知る處にはあらざりけれど、樂は人に奪れ、苦は我の獨り之を負ひてけり。噫、君の鈍ましき、何ぞ速に去りて彼等と共に歩まざる。言ふ勿れ、そも今は詮なし。と彼は幾度か獨語ちて、いつれは同じき吾等の運を、如何に逃れんとするも得逃れざるは吾身なり。又之を見ざらんとするも能はざるは我と君との運なり。我運となりとや。と我は驚きて、行き

給へ、然らば我は君を見ざるべし。 否とよ、先の影を送りし君は、又我を迎へざるべからざる運を持てり。先に行きし者は皆吾影なり、我は又君の影なるをや。 何とか言ふ。と我は叶びつゝ打目成れば、彼の怪しき人はやをら重き足を舉げて、然れど我は今去るべし。吾年は茲に盡んとす。 吾は君と再び相見ざらんを願ふ。と身を震はして眩けば、そは君が運なるを奈何にせん。又邂逅はん折には、吾掌上の樂勝たんか、吾姿は輝きて顯れ、君が喜は溢れて迎へん。我も然こそ希ふなれ。然れども君が身の運なれば、と槌もて盤石を打つらんやうに足音して、彼は徐に徂かんとす。徂け、疾く徂けかし、と我は其地響の間系すなるまで立ちて喚けり。

忽ち烈風天の一方より起りて、總て此世に浮べる黒き影をば彼方の空に運び去るを見て、我は得堪へずも眩く眼を閉ぢてけり。

* * * * *

年 の 影 終

今我前には曉の光充ちて、樂しからずや吾世は幸なりと萬の物の齊しく
 呼ばるるはあらず。

いとし子

上

「籠目々々、籠の中の鳥は何時々々出やる。晦日の晩につる／＼つッペつた。」

夏の日は何時しか暮れて、長者が屋根の一つ星、其よりも高く低く飛交ふ蝙蝠の忙しさ。駄菓子屋の廻燈籠に涼風通ひ、長唄教ふる路次に蚊の聲細く聞える折から、七歳八歳の子が五六人、真丸に手を引き合ふて、先刻の夕立の名残の行潦を飛越えながら、

「籠目々々、籠の中の鳥は何時々々出やる。晦日の晩につる／＼つッペつた。」

と面白げに唱ふて往く。駄菓子屋の店には、近所の女房やら婆様やら五

六人固つて、涼ながら世間話に興じてゐるところへ、十八九の肥つた下女が褌を片手に小腰を屈めながら入つて来て、

「お暑うございます。」

「オヤ河田様のお女中さん。」 此家の女房は愛相よく迎へた。

「家の坊様は此處に遊んでゐらつしやりはしませんでしたか。」

「左様ですわえ。先刻しがたまで此處で遊んでゐてなさいましたが、

未だお家へお歸りには成りませんか。」

「ハイ、何時もお夕飯にはお迎へに参らなれども歸つておちておるものが、今日に限つて何うなすつたのか見えなないのですよ。」

と店に胸の腰を下して、

「御免なさいましよ……然し何時も大抵此方の店の近所に遊んでゐらつしやるから、大方此邊だらうと存じましてね。」

女房は効々しく團扇を出し、

「ハイ、仰有る通り何時も私共をお心易くなさいますね。其は町の子供と同じ様に私の事を小母さんくなんぞと、全然家の常と兄弟のやうにね。貴方まあ勿體無いてはごさいませんか、何程も稚いからといつたつて私の事を小母さんだつてよ。」

「子供衆は懸構ひの無いものだよ。」
近所の婆様が横から口を出した。

「眞實ですよ。其ですから決して世辭でも何でもありませんが、私も他所のち子様とは違つて、それ溝の端は危い、大を打つと悪いなどい、餘計な事までお世話を焼きます。」

「無御面倒をおかけ申す事でございませう。何分彼の坊様お一人て、其に御両親が無いのですから、何うしてもお世話が届きませんのです。」
女中は氣遣はしうに四邊に氣を配りながら言ふのであつた。

「然様でございませうとも、祖父様の手一つで育てなされるのですもの、

其れは何う致しても、肉身の母親でなければ貴方眞實のお世話は届きませぬ。」

「三年前までは乳母さんが居りましたけれど、是も田舎へ嫁ぐのでお暇を戴いてからは、私共のやうな奉公人ばかりですもの、夫を思ふと眞にも可哀なうですよ。」

「エ、く然うてしやうとも。」
此家の女房も並居る連中も齊しく頷いた。

「御當人は未だ何にも御存知無いのですけれども、考へると涙が零れま

す。」
「何不足の無い家へ生れて來ても又斯様な不幸がお有んなさる。人間といふものは何うも聞く行かないものですね。其は然うと彼のち子は何うなすつたのでしやう。」

「最早お歸りなすつたかしら。」

女中はやをら立上る處へ、大きな聲で流行唄をうたひながら歸つて来たのは、常造といふ此家の梓であった。

「オ、常、お前、河田様の坊様を知らないかえ。」

「一雄さんは彼方へ行つたよ。」

「彼方へとは。」

「他所の人と一緒に彼方へ行つた。」

「他所の人とは何んな人です。」 下女は目を丸くする。

「知らない人。」

「知らない人では解らないから瞭然と云ふが可い。何んな人だえ。今お家から御迎にいらしたのだよ。」

「女の人だよ。何だか知らないのだけれど、僕やなんかで遊んでゐるところへ来て、一雄さんを連れて行つた。」

「サア大變だ、而して何方の方へ行きました。早く教へて下さり、解ら

ないと私が大變ですから。」

「常、解るやうに教へてあげ。」

「通りの方だ。」 多勢の顔を見比べながら言ふ

「夫は今しがたですか。」

「エ、先刻。」

「では追蒐けて行つて見ましやう、お内儀さん何うも難有うございしました。萬一私が行つた後へ歸つておいてなすつたら、直に家へお歸しなすつて下さり。」

「畏まりました。夫では兎も角も行つて見ておいてなすまじよ。今時の事だから眞逆人拘引も出まいけれども、迷子にでもお成りなると困るから。」

「眞實に心配ですよ。其ては皆様御免なすまじ。」

下女は慌て、驅出して行く。

「ヤレ／＼駈けて行つたよ、嘸暑からう。」
例の婆様が見送りながら言つた。

「だがお内儀さん、彼の河田様の坊様の御兩親は何うしたのだえ。」

「其が斯うなのさ。」

丁度話も途絶てゐた時とて、女房は物知顔に説出した。

「彼の坊様のお父様といふのは、何とかいふ學士で、年は若いが大相評判のあつた方ださうな。而して學校を出ると直に奥様をお貰ひなすつたのだが。お氣の毒な事には夫から彼のお子がお出来なされると間もなくお亡くなりなすつたさうさ。跡には唯一人の親御と乳呑を抱えた奥様ばかり。其からといふものは家中頓と火の消えた様に成つたが、奥様といふのは河田様へ來てから未だ二年経つや經たず、此儘後家に爲ては氣の毒だからといふので、兩方の親達が御相談の上、奇麗に縁を切つて御實家へ戻り、其から何處へか再縁でもなすつたのだらう。」

跡取りの「雄」さんは夫から乳母の手で育てられて、最早八歳にお成りなすつたが、祖父様は其を樂みに、且暮傍も離さず大事に爲ておいてなさるのでさうだ。」

「成程、初めて聞きました。然し大切に爲れる彼のお子は幸福のやうだけれども、お父様やお母様の顔も御存知ないといふのはお氣の毒なものでね。」

「能くある事さ。」

と無人相な近所の内儀が口を出して、
「腹は借物、御亭主が死んだ後は反つて家の爲に可く無いと、舅姑から嫌はれるのは随分例のある事だよ。其所へ行くと女は損だ。ねえお内儀さん然うでは無いか。」

「まあ其様なものか。」
宿の女房は敷遣を煽りながら答へる。

「ねえ然うだらうお婆様。」

「其は前様の言通りだが、今も此處のお内儀さんの話のやうに、來てから二年と経たないうちに御亭主に別れて、其まゝ他人の家に居るのも辛からうではないか、其よりも今迄の事は無い事と諦めて、雌縁に成る方が反て身の爲だらう。」

「けれども貞女は何とやらで、二度夫を持つといふ事は耻ぢたものです」「オヤ、前様は大層物知に成つたねえ。何時其様な事を覺たの。」

やうく白く燃揚る煙を風の來て弄れば、横さまに店の縁臺に靡くので、何れも面を背けてハタハタと團扇を鳴らす。家の女房は目を擦りながら、

「何事も運次第さね。立派な方が始終氣樂に世の中を送るかといへば、又然うても無いものさ。貧乏暇なして、何程働いてもピー／＼言つてゐる代には、此方徒のやうに家中至極息才で暮らす。二つと可い事は無いものだ。」

「然とも、天道様に依怙最負は無いら。何處も一様に日を照して下り

るが、人の運で蔭に成るものもあり、又日和へ出るものもあり。」

隣の雷干は能く乾いても、此方の雷干は夕立に遇ふ。」

「夫は油断大敵といつて、能くある事、何でも油断なく一生懸命に働かさへすれば、屹度其だけの恵もあらう。」

と婆様は借りた煙管を返して、

「然ういひながら年寄の癖に納涼などと利いた風な事を爲るのも猶且油断だらう、どれ歸つて寝ましやう。」

「私も一緒に行きましやう。」

「然う皆一度に行つて了はなくなつたつて可いではないか、もう少し話して置いてなさいな。」

宿の女房は聲をかける。

「又明晩來ましやう。然様なら。」

打連れて歸つて行くと、今迄人の間に好い心持さうに寝てゐた猫が不意

に起上り、思ふ様欠伸を爲て、其まゝノソノと臺處の方へ行つて了つた。

下

『小母さん用つて何です。』

手を曳かれながら、不思議さうに對手の女を見上げて問ふのは八歳ばかりの愛くるしい男の子で、紺飛白の單物に淺黄唐縮緬の兵子帯を房々と縮めてゐる。

連立つのは二十七八にも成らう、美しい丸鬚の細君で、夜目にもしるさ襟足の白さ、俯き勝に歩いてゐたが、

『一雄さん、貴方は私を知つてゐますか。』

『エ、？』

と又見上げて、

『僕は知らない。貴方は誰？』

『私はねえ。』

と言つたが、耐らなくなつて女は袖で顔を蓋ひながら、

『知らう等が無い、私はお前の生れたばかりで別れたのだもの。』

一雄は猶も不思議さうに見てゐる。

『お前は今年八歳にも成りだねえ。』

『然うです』

『眞實に……親は無くとも子は育つといふが、此夏まけも爲ずに太つて、お父様に能く似てゐるな。』

手を取つて熱と打眺めると。

『エ、皆然う言ひます。お父様にもお母様にも能く似てゐるッて。』

『誰が其様な哀れな事を言つて聞かせるのてしやう、お前はお父様やお母様を知つてはゐますやう。』

「僕の生れた時に皆死んで了いました。」
一雄は涙みも無く言つて、

「だから僕は知りません。」

と急に思ひ出したか、

「僕は時々逢ひたいと思ふんだけど、死んだんだから方爲がありませんね。お前は祖父様の子だと思つてゐるつて何時でも祖父様は然う言ひます。」

「然う／＼お前は眞實に祖父様の子ですよ。何でも仰有る事は背かないやうに爲なければなりません。然うすれば死んだお父様も、お母様も何んなにも喜びか知れません。」

「けれども死んだ人は何にも知りはないでしやう。」

「否、死んでも魂はお前の傍に附いてゐるから、能く知つてゐらつしやる。お前の方では知らなくつても……。」

と言ひさして又涙々と泣くのであつた。

「貴方は誰です、能く皆の事を知つてゐますね。誰なの。」

「妾はお前さんのお母様のお友達です。」

「ア、然うですか。」

一雄は初めて丁解して、丁寧に挨拶を爲た。

「好いお行儀です。ねえ。祖父様のお仕込でしやう。」

「貴方僕の家へ来ませんか。エ、。」

と可懐しげに傍へ寄つて、

「祖父様も喜びますよ。家には徳といふ女中と、其から霜といふのと、

其つさりだから淋しい。僕は外へ出ればお友達もあるけれど、祖父様

は唯一人さきだもの、貴方が来たら屹度喜びます。直に來ませんか。」

「否、私には用があるから、今日は参りませぬ。而して祖父様は御壯健

でせぬか。」

「咳の出るばかり。」

「あゝ彼の咳では定めてお困りなさるだらう。私も御介抱を爲た事がある。今でも猶且お悪いかねえ。」

「小母さん何うしても来ないの、僕は何だか一緒に連れて行きたいな。」

「私も行きたくなくつて何うしませう。」

と女は思はず靴と抱き寄せて、

「六年も前から、行きたいと思ふ心は片時でも離れないけれど、私

が行つては悪いから、一生懸命忘れてゐました。今日此所を通るにつ

けて、何う諦めても思ひ切れずにお前に逢つて見れば、私は……。」

「ヤア貴方は泣いてゐる。」

「何にも知らない者は可哀さうだねえ。出来る事なら一緒に行きたい。

又一緒に連れて歸りたい。」

と熱い涙を顔へかけられて、一雄も何が無しに悲しく成つた。

「僕は何だか小母さんと一緒に居たい。貴方は何處にゐるの。」

「遠い處にゐますよ。」

「遠い處つて何處です、横濱ですか。」

「否、未だく餘程先です、海を越えたり、山を越えたり、百里も二百

里も先から来たのですよ。」

「其様な處から何を爲に来たのです。」

「貴方に逢はうと思つてさ。」

一雄は目を丸くして少時見詰めてゐたが、

「嘘々貴方は大嘘吐だよ。其様な事を言つて僕を欺すんだ。僕は丁と知

つてゐます。歸つて祖父様に聞けば直に解る。」

「ア、其祖父様に妾の事を言つては可けませんよ。言はなければ時々逢

ひに来ましやうけれども、貴方が然ういふと最早逢へなくなるのだからね。」

「其ては祖父様に言つては悪いの。」

「決して言つてはなりません。」

「だつて僕は最早歸らつなくてはならないのだもの、餘り遅くまで戸外に遊んでゐると祖父様に叱られます。」

女も心着いて顔を揚げ、

「然うく遅くなつたら家で心配なさるだらう、疾くも歸りなさい。」

「ぢやあ貴方も歸るの。」

「妾も自分の家へ。」

「僕は可厭だなあ。」

「一雄は泣き出しさうに成つて、
「僕は何だか貴方は死んだお母様ぢやあないかと思ふんですよ。然うてはなしかしら。」

「……………」

「エ、小母さん、僕は歸るのが可厭に成つて了ふんだもの、萬一悪くなければ家へ来て下さいな。」

女は唇を噛みしめて、耐性も無く身を慄はしたが、

「一雄！ お前は可愛い子だねえ。其程妾を慕ふのは猶且離れない血統だらう。最早妾は言つて了ふが、妾はお前のね。」

と引寄せて何か言はうとしたが、急に思ひ出して、

「お母さんのお友達です。けれども能く覺えてお置きよ、お前のお母様は能く妾に似てゐた方でした。顔も、聲も、而してお前さんの事を思ふのも、眞實に妾の通りだから。」

「ア、。」 一雄は只泣いてゐる。

「お前はお亡りなすつたお父様に逢ひたいと思ふなら自分の顔を見つて見ると逢へる。死んだお母様に逢はふと思ふなら、能く妾の顔を見つて置いて、夢になりとも逢つて下さい。お前のお父様やお母様は何時

までもお前の事を思つてゐますからね。

祖父様を大事に爲てあげて、而して行末は立派な者に成らなければなりませんよ。さあ私の顔を能く見て置いてね。」

幾度かいとし子の額に唇を當て、潜然と涙を流したが、漸く時の移るに氣が着いて、

「其ては妾は最早歸ります。又其うちに來たら逢ひまじやう。」

「小母さん貴方は歸るの。」

「何時までも居たいけれど、お前の爲に成るまいから、妾は歸ります。」

「明日も來てくれますか。」

「雄は一生懸命に叫ぶ。」

「又逢へる機會があつたらば。あゝ何か紀念に遺りたいけれども、其んな事を爲たら猶悪からう。一雄さん夫ては體を大事に爲ておくれ。」

一雄は以にも言はずに縋り付いて。

「又來るのですか小母さん。」

慌しく人の駈寄る足音に、女は驚いて間の方へ立去つた。

「坊様、貴方は此處に何を爲てゐらしたのです。お家で大相心配して

ゐらつしやいますから疾くも歸りなさいまし。」

「僕は可厭だよ。」

一雄は下女の手を振離して四邊を見廻したけれども、最早其人の姿は見

えぬ。

二足三足間を追ふたが、間の裡には可憐しい移香ばかり、彼の小母は何處へか行くぞ、此いとし子を獨殘して。

悲 慘

いとし子 終

鐘の音

山寺の鐘の物語こそをかしけれ。

此一村に我ほど古き物識はあるまじ。向の岡の己こそ年経たれと私に誇れりと聞けど、我目より見れば其も近き世に生れたるなり。況んや彼の岡に根を頼める松の、齡三百歳といふも、我若き折には影さへ無かりけるぞや。

いと古き事なり、我と同じき時に此寺は建立せられ、老たる法師は都より来て住寺したまふ。いと貴き聖なりしが、二十年と経ぬに亡せ給ひぬ。其時は常に法師の教を受けつる人々、集り来て泣かぬはあらざりき。泣きたる人は皆今の村人の遠き先祖なり。

其時は我も聲を放ちて泣きぬ。そは村人が昨日今日かりそめに聞くなる

鐘の音

時の報とは異れり、若き折の我輓歌を今の村人は得知るまじ。

さて法師死なれたれば、残るは本堂と我のみなりしが、其より一百年の年月は何時か我等の上にくぐり過ぎぬ。

村人の親は死し、其子も人の親と成りて死し、其孫も亦親と成りて死しぬ。あはれ人の身も裏山の竹藪と異らざるものと、我友なる本堂は會て我に語りたりき。

其人々の亡する毎に、友なる本堂はいと厳に、しかも涙もて櫃を迎へ、我は聲を放ちて、空の上にも、地の底にも達けよと彼等が生前の徳を稱ふ。其親も、子も、孫もかくして黄泉に送れり。世は同じ事して又五十年を過ぎぬ。

或時友なる本堂のいふやう、汝こそいと幸多きものなれ。此多くの月日を経ぬれど、少しも生くるに勞れたる氣色を見ず。我——そは君の上にも喜を等しうすべにと答ふれば、彼は重き首を掉りて、いかで然る事の

あるべき、見よ我が屋根は前に傾きて、正しく雨風を凌ぐべくもあらず、我腰なる柱は屈みて、はや身を支ん力も無し、何時まで生さん命ぞ。我
 悲しき事を語るものかな。そは人の身の老なり、いかて我等に到らんや。本堂の曰く、否々汝は限なき命もちて生れたれば、他の悲しみも得知るまじ、幸ひなる者ぞと言ひ暮せしが、實に昔法師の教を受けし彼は學問の徳にて臨終の期をも前知したりけむよ、其年の秋の大嵐に、彼が凄しく叫ぶ聲を聞しが、夜は暗かりければ然りとも知らざりし、翌日見るに彼は死たりけり。柱は折れ、屋根は飛び、身のうち離れくりに散り失せしぞ不思議の最期なりける。

村人は驚きて馳集まりぬ。然して口々にいふやう、思はぬ禍も出来しものかな。我等が各自の費はいかばかりぞと。我は此時深く人てふもの、無情なるを知ぬ。彼等が祖先より、幾人と無く、命盡ぬれば皆我友の慈に安かに後の世を葬ひけるを、己れくの身の上にてこそ泣きもしつれ、

費さへ惜まざりし、然も思ある本堂の死に逢ひては冷かなる事斯の如し、哀れなるは我友なり。

日數経るまゝに有繋に捨もならざりしや、人々は漸く新に寺を造りぬ。我友の跡繼なり。然れど我は此新なる友を喜ばざりき。如何にとなれば、彼は萬事今めきて、見かけはいと美しけれど、心のうちはなかくに頼むべくもあらず。猶彼は鐘の素性を知らねば、何くれ我は顔にのみ振舞ひて、我をば此寺の寄食人の如く輕しむること心外なれ。壽ければ耻多しと人の語るも理りなり。

斯くて又五十年を過ぎぬ。驕る者久しからず、彼が終を語らば好き誠となりぬべし。或年の冬なりき、原因は小僧が罪なりとや。夜半の頃怪しき爛めらくと庫裏の屋根に立昇ると見えしが、折からの裏山嵐に、火は忽ち勢を増して、彼が全身は一圓の猛火と成りぬ。其光盡より明かりしゆゑ我はよく事の始終を知ぬ。さりとて今を去ること二百年も前な

れば、人々は知るまじし。
 我も其時の忙しさ、今思ふも恐ろしや。和尚も小僧も一圓に我を責立て、
 鳴れよ〜と争ひ撞くほどに、我はあらん限りの聲張上げて、此不時の
 凶變を叫びたり。人々心得て馳せ集りし折は、はや残る方無く灰と成り
 て、何れもの粉骨も効なかりしぞ力なき。
 心からとて幾品の貴き寶物は彼が爲に滅びぬ。救ひ得たるはいと僅なり。
 猶秘に語るべきは、此寺に火伏の大黒とて、今の世までも人の信仰深き
 は、そも此時よりの事なり。如何にも佛が火を避け給ひしは實なれど、
 其理由を語れば、全くは淺ましき和尚の策畧ぞや。火の揚りたる時、彼
 は手近き大黒の像を抱きて馳出て、かゝる忙しさ中に裏の大木の洞に据
 置さしを我は確に見たり。其をば火鎮りたる後ゆくりなくも見出したる
 やうに爲なして、事々しく言立てけるより、在家の人々は誠と思ひ、夫
 より此寺繁盛して、和尚は大なる徳分を得たり。我つらく案ずるに、

大黒火を避け給ふ程ならば、阿彌陀、觀音、欄間の迦陵嚩伽までともし
 もに走り給ふべきが定なり。然るを諸佛は火の中に残り、同じ木像の足
 下に俵を踏へし御方のみが一飛に逃げ給ふ理あらんや。假にそを實の事
 なりとせば、他は何とも成れかしたや、佛にはあるまじき心底をば、心
 ある人は笑はなん。あはれ偽いふ人の手近く在せしばかりに、大黒も心に
 無き嘘を吐きて、いかばかり本意なき事に覺すらんと笑止にぞ覺ゆる。
 此和尚は程なく本山の住寺に轉じけるとかや、彌々の末世ぞかし。
 三度目の本堂は人々大黒天への歸依深かりければ、いと美しく建立され
 たり。又其ものも以前のと異りて行も殊勝なる故にや、折々の修繕行届
 き、今に礎の固く残れるぞうれしき。
 さて我物語は人々の上に移るべし。先づ何よりも今の村長の家の昔こそ
 思出さるれ。彼が十一代前の祖は、此寺の鐘撞男にて、我とは此上なう
 懸にせしが、或時梯子を踏外して逆様に落ち、右の手をしたゝかに挫

きて、鐘撞く事もかなはずなりしより、彼の老翁いたく悲み、斯くては明日が日の生活にも事缺ぬべし、今一度本復せしめ給へと、且暮佛に立願せしが、三月ばかりにして舊の如く成りければ、或日我前にて其腕を振試みつゝ、いたく喜び居たるを見き、彼に至りて如何にして今の如く立身したるや。

其と反對なるは、今村端れに草鞋賣る老婆が家なり、百年程前には彼が家は近村に並び無き豪家にて、當時の領主にも知られし家筋なりしを、三代打續きて放蕩なる主人ありしかば、榮華はやがて夢と成りて今の零落、昔知る我は折々思ひ出て、涙に暮るゝなり、あはれ此寺には難有き大旦那なりけるを。

新田の與作が夫婦の奇しき縁を語らんか、凡そ五六百年も経ぬべし、彼が祖々は各自の野へ水引かん争ひより仲悪くなりて、秋の祭の時、妻の祖の方より喧嘩を仕かけ、石橋際の畦にて人ませもせず引組みしが、双

方日頃の力自慢にてありければ、今に忘れぬ見物なりけり。與作が祖が先づ足絡にえい／＼と揉みてどうと投げれば、妻の祖は起上りさまに、對手の腕首引掴みて、背負投げに仕て遣つたり。さて是よりは打ちつ蹴られつ、やがて寄るまゝに無圖と組みては、彼の畦をばころり／＼と轉び行く様、天晴力者の相撲なりしが、終には泥田に落入りて、勝負に果しもあらざりけるを、折から通りかゝりし旅の者中に入りて漸くに引分け、村役人に引渡して事済ませしが、彼等一代は互に口をさく事も無く、與作が祖は其子にまで此無念さを忘るまじと遺言したりしを。變れば變るものかな、彼の代に成りてさまざまに懸望して今の妻を迎へぬ。先祖が聞かば何といふらむ。

市郎右衛門は貸金の質に孫助の田を奪ひたりとや、そは大きな曲事なり。彼の六代前の母が、夫に死別れて如何にも途方に暮れける折、孫助の祖哀れがりて錢五貫文恵みければ、涙を流して打喜び、其人歿後

月毎の墓參を怠らざりしは、我常に見たる所なり。
 子太郎の背戸杉の折れて、母屋を潰したりと人の語るは眞實か。彼の杉は凡そ二百年前、先代が捨植にしたる苗なり。其時引抜きて塵溜に打捨てたらんには、今の禍はなかりけるものを。

此寺の當代の住寺は村の根生なり。十八年前の事なるが、和尚の實家に限無き腕白の悴ありて、寺小屋の往復には必ず我に磔を投付け、或は時ならぬに撞鳴らしなどして散々の悪戯を盡しつ。或時常の如く鐘樓に昇りしを見濟し、寺男が密に梯子を引き去りければ、流石の悪太郎も我を折りて、我前にて聲を限りに泣き出したる面構、血統は争はれぬものかな、住寺が經讀む時の容貌に生寫しなり。

其頃同じ程の年齢にて、末頼もしかりしは馬喰午吉が先々代なりき。朝は逸早く門前を通るに、市に賣らん爲の鶏卵を籠に入れて背負ひ、書物を手に讀みつゝ行きしが、後の世の立志談にも載るべき器にて、誰も此

兒を褒めざるはなかりし。やがて三十四にも成りなむには、家の名を擧げ、村の譽も残したらんに、惜むべし十六歳の時、霍亂といふ病にて一夜のうちに死にたり、家は弟が譲り受けしが、是は兄に似ぬ凡人なりき。然れども馬喰を業とするまでの心様にもあらざりけるを、午吉の代に成りて賤しき者とは成果てたり。彼の神童こそ二無き者なれ、いかにしても生けたかりしを、我の如きは其身代ともならず、變り行く世に要も無く長命するも訝しき結縁かな。

時計といふものは誰も持ちたれど、初めて購ひしは太兵衛なり、是は未だ二十年も經ぬ事なれば知る人も多かるべし。太兵衛は物數奇なる男にて、珍しき物といへば、何にても求むるが常なり。寒暖計或は洋服、何時も人に魁けて村の爲には好き智慧の仕入屋なりしが、其も理りや、彼が祖父は江戸通の飛脚なりければ、
 限なければや止むべし。さても我命の長さことよ、世には我ばかり種

々の事を知りて、談の數多く持ちたる者はあらざるべし。然れど此多くの變りたる物語も、わが見聞さするうちに、何時か又舊の様に歸りて、常に同じ事を繰返すが常なり。見聞も可き程に爲すべき事を、斯くて今五百年も過ぎなば、村長が末は鐘撞男とも成り、草鞋賣る老婆が子孫は舊の長者とや仰がれん、興作が縁も一代なり、市郎右衛門が家に善人も生れなば彼の罪の消え失すべく、子太郎が杉は伐りて柱に爲るといへば、是は目前の事なり。和尚の子に和尚無く、馬喰が家に聖人も出づべし。我は其時の事をも見るべく、なほ幾代をか生くるやらん。山寺の鐘の物語こそかしけれ。うゝ

鐘の音終

權の雫

何處を我心の住よしと思ふ世にもあらず。是より前途は西か東か、さして行く方を問ふなかれ。出でては雲の風に任せ、去りては水の行に隨ふ。我背後には心も残らねば、輕し袂の秋の風、そが吹くまゝの思なりけり。朝に咲かむ朝顔の花を見れば、會て東の間の喜に充たされし我面影を思出で給へ、夕に散らむ桐の一片の其窓の戸に音信れなば、君を思ふ我が心の其處にも通ふと見給へかし。いづれは天地に身を置かむ處も定めず、人の心に情を見捨れば、物言ふ事も煩はしくて、昨日は百舌鳥啼く山蔭に落葉の哀れなる姿をなつかしみ、今日は潮の花散る海に入る日の空を窺傾けつゝ、露置きわたる花野原、野末の床に病みて死なむに、我一生は如何ばかりをかしからむ。萩に聲あり、秋はそとろに風に立ちて今年

も淋しく病める身を、今を旅立つと書捨て、保科四郎が飄然と都を去りしも、早去年の事とはなりぬ。

夫と聞きし戀人は如何にづらしと嘆きけむ。あはれ其人が思ふまゝの歩みには、一人残れる妾を願ひとも爲給はざるか、朝に道を行く者は其處の夕を見ずと言ふ、夕は此處に一つの星あり、秋の林の風に騒げは、葉ごしの光に君を戀ひて、今宵もかなしき姿ありとはいかて思出てむとも爲給はじ。今は此處に妾あり、高さ御空に雲立惑へば其にも似たる君を慕ひて、今日も思に沈まむとは、終に知り給ふ折もあらざるへきを、藤子は只ふるに彼を情なしと泣きしが、其も一年の彼方となりて、今年も同じ秋の色に其朝顔の花咲き出でしを、かぎりなくもはかなしと見しや曉の風に堪へて、つひに病の床には伏しけり。

箱根、熱海の朝も嬉しからず、鹽原、奈須の夜もつらく、只しみぐと昔思へば、彼處は安房の鏡が浦、二年の前の夏なり、友の誰彼と遊びし

時よ、ゆくりなくも彼君の訪れ來給ひて、二日三日は諸共に面白う語り暮せし事もありき。其頃は未だ浮世の苦しさ味をも知らざる身の、寄せて音なき浦の浪を示して、樂しからずや、我等が世も斯の如くに穩なるべしと我肩に手を措き給ひし。妾も人の事の其處に松風の靜かなるばかりと思へば、只うれしさの心も長閑に打領さしが、彼處は何處と問出る、其は洲の崎なりと君は教えて、其處よりは海荒く浪立騒ぐ様の、御身は夢にも知らざらむ程なりと驚かし給ひしが、圖らざるに我等もいつか世に渦く浪に吞まれて、穩なるべしと思ひし行末は斯く、君は行方も知らぬ空に漂ひ、妾は一人磯邊に残りつゝ、圓の夢今は消えて跡なし。

然れど、其夢の消え失せぬるも、戀しの土を又見む折には、其時の事のいかに面白くも心に浮ひ出づらむを、此處は嵐の夜寒し、彼處も夜の嵐の寒くとて、せめては昔の心を其松蔭の、浦浪の、沖の白帆の趣に見むこそ、なかくに此身の願なりけれと、直と思定めては早何事も打捨て

い、心知りたる召使の女一人と、乗りたる船は都の曉をうしろに、羽田富津の沖遙々と、横須賀、木更津の陸を水の遠くに見やりつゝ、浪靜に繪のやうなる那古の濱には着きけり。

慈母手中線、遊子身上衣と行吟して、四郎は今日しも北條の町に入りぬ、かゝなふれば早一年、愜はざりける望は誰をも怨むまじと盟ひつゝも、何かは知らず心亂れしより、我も道祖神の招きに心を動かし。何處にて何を見せうぞ槍笠、其心あてのあるにもあらねど、北の方山越ゆれば、奥の風流に我を悲しみ、高館や草を分け行く細道の、露には濡れ、風には吹かれ、放浪ふる身も久しかりしが、今年筑波の邊に知己を便りて、暫時は假の宿に足を留めつ。又や秋立つ風に驚かされては、銚子、勝浦、小湊の景を探りつゝ、是もなつかしの鏡が浦の風光を見ばやと、限りなき悲しさもて、此面白き故郷には來ぬ。

北條館山の町を出れば、松青く、寄浪白き濱傳ひ、那古の觀音を右手に見て、左は一目に館山灣、鏡が浦の白を抱きて眠るが如き陸の様を行くくも眺やるに、狭き心も何とはなしに開くやうに覺えしが、又彼事此事と其昔の紀念を思出づれば、俄に騒ぐ胸の苦しく、悲しの我や今は斯る姿に、一年餘を空しく過して、是より先の道は知れど、是より後の心は知られず、氣の向くまゝの旅とはいへ、何を望みに草鞋穿きて、此春秋を過す事ぞと茫然としてイむ後に、誰とは知らず馳寄りて、四郎様と呼かくる。

驚きて振込れば、此邊には見ぬ風情の女なり。我を呼びしは御身かと訝るに、彼は打笑ひて、早御見忘れなされたか、私は兼てござりまする。然りとては忘れも爲ぬ、此女は戀人の召使なりけり。

夢かとはかり此方は少時打目成りつゝ、さても久しぶりに逢ひたり、何しに此處には居るぞとやう／＼に問出づれば、其御尋は此方より申上げ

る事、去年俄に御立ちなされてよりは、何の御音信も承りませなんだが、其より長き月日を、貴方は此處に斯うして御送りなされてか。否見る如き姿に、昨日上總の宿を出て、今日踏入りしばかりの事、其に就ても其方は此處が故郷か。思ひがけずも逢ひし不思議さよと常の快氣なる色に見ゆるに、女は少し首を下げて、御存知なければ御不審もござりませしやう、實は私が此處に参りしは今日の先刻方。何しに來てぞ。嬢様の御保養にとて。さては藤子も此地にかと四郎は思はず踏跟めしが、得も言はれぬ心地のして、思へば可笑しの今日の旅路かなと嘆きつゝ又泌々と打沈みぬ。

何を其やうに御思案なされますぞ、丁度折よく御目にかゝりましたからは、何を措いても嬢様の御宿へ御越しなされませぬか、長らくの旅の道々随分面白い御話もござりませしやう。其も承りたし、御休足もあさせ申しだし、彼れ彼處に見ゆるが御宿の軒で御ぐりますると早案内顔に行

かむとするを、待てと止めて、其方は何を言ふぞ、心任せの旅なれば、行暮れては知らぬ家に枉げて宿をよ夜はあれども、女ばかりの保養の家に草鞋脱ぐは我好まぬ事なり。其は又何を仰有ると女は目を睨りて、御遠慮なさるは人にも寄りまする、御親類も同様な貴方が、然うした事を御氣遣ひなされうとは、東京にお住ひの折は案内も無くもいてなされて、不意に驚かし給ひしも常の事ではござりませぬか、私は右にも左にも嬢様に何の御遠慮と言ふ面を一目見て、其藤子に心を措けばぞ、今は斯くして旅の空、行方も知らぬ身にはなりぬる、と四郎は心の中に泣きしが、何といふても我は行くまじ、今日は少と急ぎの道、是より鋸山の勝を探ぐる心なれば、歸途には必ず立寄りらむ、其時は愛さ面白く話、随分種はある事ぞ、松島の月、越路の雪、一年間の旅の土産は其方達の聞疲勞るゝまで語らずては止むまじ、其を待ち給へと言捨て、歩出づる袂に女は確乎と絶りて、御戯れか、然りとては過ぎたる為なれやう。何の戯をい

ふへきぞ、只放せ、雨風に曝されたる衣の、強く引かば切れやしぬらむ口惜しきよ、と四郎は目を他方に船形あたりの景を眺めぬ。

さても一年あまり見まのらせぬうちに、貴方もいかう御變りなされまし、其御心の情なさは。さればよ我も北白河の關を越えては、身も寒かりし、心も冷し、是より都の風にも染みなば、又以前の我に返る事もあるべきか、否夫も覺束なものを、必ずとも昔日の四郎と見給ふなよ、浮世を捨てたる我にあらずも、又浮世に執着く身にもなし、只歩くまゝ行くまゝに、人と語るも時には五月蠅くて……歸りたらば有の儘を藤子殿に傳へ給へ。只吳々も昔の保科にあらずと傳へ給へ。何て其やうな御話が出来まじやう。と女は涙を流して、是も御存知無ゆゑに、然うは固苦しう仰有るのでござりまじやうなれど、彼の方は其時の事より順と御人の變つたやうになり給うて。と言ふを慥しく打消して、其を聞いて何にかなるべき、語り給ふな、心は如何に變りたりとて、我等が境遇

の變るにもあらねば、語り給ふな、人は一度物に懲りては美しき其香のへ厭ふものぞ、世に男女の中に過去りし事を顧みむはいと恐の所爲なり、又未來を知らむとするも淺ましき願なるらむ、男女の戀は只目前なり、誠は、然なり現在を放れずと我は思ふ、其一時の樂に腹膨れなば戀は夫にて足れり、否夫にて足れりと思ふべきものならずや、今の冷なる心もて血や湧立ちし過去の我を顧みたりとて、其は悲を呼びむより他の効はあらしを、今の狂へる心もて十年二十年後の望を極めむとするも何をか得る處のあるべきぞ。と砂の上に腰を下して、斯る事言ふたりとて何にか成らむと笑ひ給ふな、我昔の心を知りたる其方なれば、今我は少時我獨言の聲を大う爲るを厭はじ、戀は現在ののみ、然して又價値のみ、凡そ世に形ある物の價値あるは幸福なり、戀は形なきもの、只價値のみなりと其方も思はずや、然れば此處に我等が戀の永久に續きたらむには、其は戀と幸福とを併せ得たる折の事なるべし、よしや今雲間を漏れて、

地の大なる間に消ゆる稻妻の、夫にも人の戀は似たりとて、彼が價値に異はあるべきか、實に稻妻を過去に願れば、其は只の闇なり、實に其光を未來に望むも只闇の空なり、然して今日の前に光る稻妻は形なきもの、價値なるべし、あはれ人の戀は其、其より他には出でずかし。斯く言はば、其方は我を一時の熱に浮かされて、人の戀を私する者とも言はむか、是を得るに急にして捨つるにも亦情なき者とや言はむ、然れどもそは過てり。我は幸福を尊むよりも、戀を尊む事の如何ばかり美しからむと思ふなり。我は只尊むものを、我戀は我命なり、又價値なりしものを、實に其命と、其價値は我身の上には彼の朝に咲く花の如く短かりしを其方もよく知りたるべし、朝の花の夕に散りぬるも、彼には命あり、色あり、香あるものを。

此處に悲しきは幸福を得ずして、彼の戀のみを知りたる人なり、然れども其人には命あり、其方は彼を憐む事散りたる花の如くなるか、然らば

其人の一生はまことに價値あるものなりしならむ、喜ばしきは物の幸福をも併せて得たる人にあれど、其も人の心に任ずるものにあらねば、あゝ人の命は餘りに價値なる哉、天の與ふる幸福を攫まむとするは餘りに卑し。と四郎は堪へ得ずしてか頭を押さへて俯さしが、戀て又微に打笑ひて、我彼人を見じと言ひしを、其方は情なしと怨めど、今にして藤子を見むは如何にしても我爲し得ぬ事なり。今の其望に破れし境遇と今の冷き心もて其折の事思出さむには、苦しさに我は斃れなむ、又萬一にも我命の再び幸なき彼人の上に宿らむには、如何に此身はつらからむ、あはれ如何ばかりつらからむ。

我が戀ふる人は彼の秋風の吹く處に、此目の行く空に在りと見て、思ふが儘に飛歩く此身の氣安さを願はむこそ可けれ。逢ふまじよ、然れど我も人も悲しき事には夢といへる一つの故障ありて、去年は今年の夢となり、一昨日は昨日の夢に入り、いつまでか人を泣かするを辛き、過去り

し事は思はじと爲るも、是のみは免れぬ夢といふものには、我身も屢々襲はれて、人知れぬ夜半に泣きたる事も幾度か、あはれ是のみは是非なしや、然れば斯かる様にて今日も明日の夢にや入らむか、こゝに此地に來しも夢、其方に逢ひしも亦夢ならむ、只何をも知らず病みたる人よ、君が假寝の今日の夢に、我久々に訪れて、斯く語りぬと思捨て給へと起るに、女は又も引留めて、其言は聞えませんでした、然し夫は餘りに貴方の御勝手、御自分さへ夫て濟めば、他は何ともなれとはよもやお思ひなさるまじ。

何とも成り給へ、と四郎は荒々しく袂を拂ひて、我身は昔しより勝手なり、我言も元來勝手、其ゆゑに昔しは果敢なき戀をも爲たりき、今は果敢なき戀を追ふぞ、其方が我を止るむも勝手、我行かむと爲るも勝手、藤子が病みて此處に來ぬるも亦其勝手の業にはあらずや、是より先の勝手次第に其方達も何とも成れ、我も我命の再び人の上に宿らば、其時は他

の誰をも戀ふべきものを、彼の人も其氣儘に夫持つ身に成り給へと、力に任せて突放し、後の方の松原に馳入る跡は追へども及ばず。

東京通の流船は今しも館山の濱を離れて、鏡の名ある海の内を走れり、甲板に群れたる人は、今此彼處目に入る陸の景を語り合ひしが、今船形も後に見捨つる時、吐出す船の煙は濃く靡きつゝ、やうく薄れ行く方には、はや夕暮の色も見え初めぬ。

今此船の欄に寄りて、淋しく立つは彼の四郎なりけり。あはれ我は何をか爲しけむと彼は遠く松原の方を見やりしが、やがて物狂しう我と我頭を叩きて、あゝ我は何を言ひしか、今にして思へば眞に怪しき所爲なりけり、聞けば藤子は病の爲に今日しも此地に來りしとか、其病とは何故ぞ、我れも病みたり此地に來しは二年前の樂しさを又見むこともあらむかと、果敢なき戀の願なりしを、彼も然る心にはあらずや、然りとては

哀にも亦嬉しき人の心なる哉、其をしも喜ぶ事は爲す、病ある身と聞きながら、せめて一度の訪れも爲すて、あゝ此四郎は何を言ひけむ、只管者に追はるゝ如き心地して、我とは無く都へ歸る此船に何とて我は乗りたるものぞ。

勝手に爲よと言ひ捨てしを、如何に悲しと彼は聞きけむ、勝手に爲べしと言残せしを、如何ばかり情無しと思ふらむ、あゝ過てるか、過てるか、是より後は盟て見ずとも、ゆくりなき逢瀬を機に、一度昔の其人を見たらむには、或は我怪しの心も解けて、其樂しきはと口惜しげに欄を握り詰めしが、又静に後に倒れて、其も効なし逢ふまじよ、逢ふては中々辛からむ。思へば彼處に見しも奇しき運にて、此處に別るゝも亦斯く定まれる運なるべし、世には知らずの間に逢ふべき機を外に行違ふも多かりなむを、知らざれば其も悔ゆる事にはあらず、其も運か、逢ふまじ、我運は知らずして行違ふこそ幸なるべけれど、彼は高さ空を見上げつ。

彼時夫と聞きし藤子は絶入るばかりに哭さしが、せめては其人の足を止めし地にと、彼の松原の下に来て只茫然と佇むまゝに不圖此船の行く方を目成りぬ。然れども其内に四郎の在りとはいかてか知るべき、富山の邊に怪しき雲は起りて、雨や來ぬらむ今宵の空を、心細くも一人して今は何處を行き給ふぞと、侍女を顧て又泣きけり。

彼の大空に數多き星は、繞り繞りて行逢事も無く過ぎぬるものと、四郎は其時涙を流しぬ。

秋を遠ざかり行く陸の方には、今日もうそ寒の露立置めて、微に見ゆる彼や北條、是や館山、秋を黄める木陰に、一際高き御寺の菫は、それこそ那古の觀世音。

權の事終

川殿原

こゝに初春の祝義をさむと、先づ小殿原こそ参りけれ。面白の名や、
 あことの生國はいづれぞ。西國の海に生れたれども、平家盤の平家にも
 心を寄せず、名は東國武士のそれにも似通へど、鎌倉海老の源氏にも隨
 身せず、形は同じ魚類ながら、鯛鯉の群に入り、魚店の板に馳集る事を
 爲て、かへりて勝栗大豆と共に乾物の桶に籠居の、升に量られ、袋に詰
 められ、大晦日の夜には猫の鼻を恐れ、元日の朝は重箱のうちに寐積む
 身は、又無くをかしき生涯ならずや。打見たるところ丈矮く瘦細りて、
 わざくれ物の用に立つべしとも見えねど、身のうち骨と引締りて、力瘤
 むらくと反りかへりたる様は、いかで餘のもの、及ぶ處ならんや。色
 の華やかならぬも又汚くるしからて、なにとやらむいふなる絨毛の際立

たぬは、實に心ある武夫のよそひなりけり。然ればこそ御家の大事と聞
 くならば、同じ心の敷の子どもを語らひもよふし、牛旁の桶を突ならへ、
 昆布の逆茂木引つくらうて、蓬萊山の麓に立籠り、黒豆の丸のあらむか
 ざりは、天晴一戰仕らむする志はありけるものを、田作など賤しき
 名に呼ばれ、或はごまめの切齒と効なきもの、笑ひぐさ引かるゝぞ口
 惜しき。形の大なるもて尊しとせば、雌の徒に歳暮の天井に釣られた
 る、鱧は猶更臺處の壁に古傘古提灯と伍を等らして、祝義の席に遠ざか
 れるを何とか言ふべき。我等ももとより雑煮の鴨と味を比べむ野心はあ
 らねど、照ごまめの風味は鮎の甘露煮も物かはと、開付ぬ事まで言罵し
 るにぞ、近ごろ殊勝にも覺えられて、一々に其名を問へば、小揚技の太
 刀佩いたるは兄の十郎、太箸の長巻ちつ取りたるは弟の五郎と高らかに
 名乗りぬ。

御殿原終

志のび音

京へ商用の歸途、二年ふりにて立寄られし叔父の、此身には並ならず目を懸け給ひて、秀と秀と片時も傍を去らせぬ者に爲給ふ。總領の兄は京都の學校へ寄宿なされ、腹異りたる弟二人が腕白に、終日世話焼かせる、女の子一人、其を可愛と思はれての此御寵愛か。年効も無う役には立たいてと父上が笑顔隠し給ふは、繼しき母への手前然うありては反りて面倒と、苦々しく見ゆるも理や、是程の事には氣着かいてならぬ等の叔父は、一向に氣にかくる體も無く、喃茂次郎、此秀の能う似た事はと、我肩に手を措きて、河津の三郎祐泰にと醉に任せては應て實母様の事まで口走り給はむ氣色、迷惑氣に見ゆる父上と、興覺頭の母様を見比べて、ほとく穴にも入りたき心地なり。可愛がらるゝが反つて怨めし

く、憎がらるゝが我身の常と、家内の者には僻見して居れど、他所の人にも今から斯う思はねばならぬか、然りとも知らぬ弟達は羨ましげに首傾げて、女は一倍有徳なものと思ふらしき有様、とても人は素直に育ちたきものなり。
時に茂次郎、お常殿にも相談せうと此家へ來てから思ひ出したが、此子も最早十七と言へば、追付け身の極をつけずばなるまい。何の途他所へ與らねばならぬものならば、私に任せては下さらぬか、斯う言ふたら、氣にかけらるゝか知らねど、何にしても此處は田舎、美しうても氣の爲か何處やらに土臭い香があるものを、私に取ては一人の姪を葎のうちに朽ちさせるは口惜うも思はるゝに、御前方さへ承知の上なら是から東京へ連れて行つて、立派な處を見立てた上、随分お前方にも譽めらるゝやうに、私が引受けて嫁入させまじやう。夫も精々手許へ置いて仕込みたいなれど、知つての通りの荒い細工屋、出入の人も多し、事々に爲にも

なるまじければ、辛くとも一二年は屋敷奉公させねばならぬが、是も當人の爲、他人の飯を食はては人間が丸う行かぬものなれば、それは覺悟せねばならぬ。然し何も要らぬ差出と断らるれば夫までなれど、自體の世話好て言ふばかりではない、此屋の爲、當人の爲、必ず悪い事もあるまいと思ふからと改まつての相談。

しみく辛く思ふた此春の事、密り叔父様へ手紙を出して、他人の中へ出らるゝ事なら、何のやうな辛い奉公も爲ましやう程に、東京に呼取り給はれと御願申せしに、其時は酷しき御意見の返事下されて、呉々も然る不了簡起さぬやう、女は女らしう何事も辛抱爲よとありしが、さては機を待ちて斯うも爲給はむとの御心なりしか。善きに就け悪しきに就け、自分の身の上の事となれば、此處に居るのは氣が詰り、衝と坐を外して次の間に出でしが、有繋に他所に吹く風とも思はれず、其儘襖の陰に寄りて聴耳立つれば、御両親とも少時は何にも云出給はず。斯う思ふ

たらば又無き我儘かは知らねど、逆も妾が居たなら丸く納まらぬ此家の朝晩、夫は決して誰の罪でも無く、唯此身の僻みからとは言ひながら、如何に妾が謹みたりとて、今更澄んだ水に成られうか、其も大根は世間といふもの知らぬ女の身ゆゑ、一概に曲つて育つた心であれば、今人中へ出ることは此家の爲にも隙を取除け、妾の身も輕うなり、其上世間の味を覺えて、又戻つて來る時には家の中の情といふものも始めて解る事であらう。鈍に生れた心無さは、親の慈愛も兄弟の情愛も、常の事として少もうれしとは思はぬまで、曲りくねりし心の硬さ、醫令この後此家にて下へも置かれぬやうに仕向けられたりとして、自分で自分の氣を疑ひ終には其氣も狂うであらうに、夫よりも他所で辛苦に遭ふが藥、右左はなしに唯此土地を離れさせ給へと空に神頼の我儘をば言盡しつ。父上とて其とは口に出し給はぬが、時々染々思案もなざるゝやうなれば、是を機に手放す事に取らめられう、繼母様とても何かにつけて否やを云はれう

苦は無しと極めては見なれど、未だ氣にかゝる事のみにて。
 夫より一日過ぎ、改めて妾への話には、叔父の世話に成りて東京へは行
 かぬかとある、未だ返事も爲ぬうちから、何の此子に不承知があらう然
 し是から永の月日、憂い辛いも多からう他人の中、堪へかねたらば戻つ
 て来やれと彼の繼母様の口、若しも其位の事に戻つて来たらば、其時は
 何と言はるゝ事ぞ。さて愈々行くに極れば、又悲しき心に成りて、十七
 年の馴染の家を出て、遠き彼方に便らむものは叔父様一人、他人の中
 に交りて味知らぬ水仕奉公を爲る事かと父上の顔見上げて涙零すと、不
 承知でもあるにかと問返へさるゝも悲しく、差俯きて居たれば、叔父
 は横より覗込みて、奉公は付けたらど、其外に其方の爲に善い事もあら
 う程にと眞顔の御言葉の頼もしげなるも又悲しや、皆様揃うて妾の爲善
 かれとの此事、何の否はござりませしやうと答ふれば、父上は頷かるゝ、
 母様も笑顔見せて、取分け満足な叔父様は私に息を吐きなされしやう

なり。

是は可さか、彼は斯うと要らぬ事にも氣を着けて、是から前途の女の心
 得といふもの聞かせ給ひし父上の御顔は、氣の所爲か此二三日は太くも
 年寄り給ひしものかな、春の末より夏中は毎年腸の病に苦しみ給ふ御身、
 以後とも大切になされませ、常々言はうとは思へども、若し言ふたらば
 面倒と差控えて居ました、御腹の薬は椎茸と蕪で癒るものと、天晴御醫
 者になつての母様の指圖、必ずともに悪いとは思はねど、立派にヒを取
 らるゝ醫者でさへ、其日其日の病人の容態に依つては、薬の調合も變ゆ
 るもの、何時も椎茸蕪ばかりでは何うも安心がなりませぬと、夫とは無
 に言置で、母様へも改めて暇乞ひに行けば、何呉れと和しい言のうち
 より涙拭はるゝは、有樂に今日を限と思ひ給ひてか、別れといへば斯う
 爲いてはならぬ者との御心か、然りとては我心の僻見、鬼でもなき方を
 陥るゝ罪は深し、許し給へと妾は腹で御詫び申せしが、今の情の百分

の二だに、常々見せて下された事ならば、妾も斯う曲けた心には成るまいものを。行李一個に當座の衣服を詰めて、夏の物は後から届けて貰ふ筈、支度は大方調ひながらも、未だ何となく忘れ物爲たるやうな氣になりて、譯も無く立騒ぐを叱られ、家を出しは十時、今日の十一時に出る瀧車で行く事には極りぬ。母様も弟二人も、霜も久八爺も門口に送り出で、御機嫌能う御出發なされませと口々に言ふも、只管に涙聲なり。妾は顔も上げられず、車の上に泣いて居るうち、眞先は叔父様、後の車には父上が是も淋しげに停車場まで送り給ふなり。霜といへば彼の子も丁度妾と同年、二年前に奉公に來たが、妾とは大の交好、此方も彼を他人の様には思はず、霜も、慣り多い事ながら一通のち主様とは思はれませぬと何につけても親實に爲て呉れる。妾が辛いとて一人て泣いて居る時、共に泣くは彼、慰めて呉れるも霜、妾も萬に蔽うて遣れば、霜も過は我物に引受けて、折檻の筈に身代と成つても呉れたが、實の實の實を言へば、

父上に御別れ申す辛さを除けたら、一番悲しいは彼と分れて行く事なり。昨夜も妾が居間へ來て、今度の御話は残らず伺ひました。然うした事で明日は御分れ申さぬばならぬかと思へば、私の悲さは身を切らるゝやう。斯様な事を申上げたら御出發の際に縁起でもないとい叱られうかと、一人で泣いて居りましたが、今宵一言でも御話申さずば、最早何時を待つて御目にかゝる事がならう、叱られても貴方にならばと推して御別に参りましたと言はれし時の悲しさ。能う來たを霜、何かと用も多いため、妾も話さうくとは思ひながら、今まで自分の口から其方に斯うとは話さなんだ、夫を必ずとも怨んで呉れな、叔父様の御親切ゆゑ、是からは樂な身に成らうと思へば、妾の爲には嬉しい門出、然し生れた此家にも御両親にも兄弟にも、永の年月馴染んだ其方にも別れて、是からは東西も知らぬ土地へ行く妾の心細さは、何れ程であらうと思やると言へば、御察し申して居ります、此霜は山奥育ち、何にも辛いといふ事は知ら

我勝氣ながら、夫でも家を出て奉公爲ると極りました時には、一日二日只もう泣いて居りましたものを、御不自由も無い御家、是が正路で行かうなら一寸でも御門の外へ御出なさる御身ではござりませぬに、他人の中の御膳も上らねばならぬとは、又其上に何程都の風が可いとて、彼地へ行たら御奉公もなされうとは、よく不運に御生れなされたもの、無慈悲しい、辛い目にも御逢ひなさるゝ事であらうと泣伏すを見ては、妾も胸塞がりて聲も出でず泣いたりしが、夫も是も皆妾の身の爲、此處に居て家中の可厭な思を見やうよりは、知らぬ他人の中こそ氣安さ、奉公爲るといへば苦しけれど、夫も人らしい人にならうと思へば、何の斷食して願懸ける者もあるではないかと膳の太い事言ひはしたが、車の止りしに心着けば此處は最早停車場。京の伯母様が生きて御在での時分、嵐山の花に來いと誘はれて。此處から流車に乗つた事もあるが、其時は西、今日は東、人の運も風のまに／＼斯うも方向の變るものか。

發車には間も無いので勿々に乗込めば、早忙なき鈴の音、父上は窓に絶り給ひて、密々叔父様と語らるゝが、折々妾を見給ふ眼は一杯の涙なり。能う見覺えて居て下され、妾も貴方の御顔は篤と拜んで置さます、果敢ないものは人の命、明日が日にも死にましたら。是限りの事と思へば、拭けども／＼絶えぬ涙に、あゝ臆氣な其御姿や。通し流車で行くと聞きしに、一時頃着いた停車場で叔父様は降り給ふに、何故とは知らねど妾も後を着いて行けば、唯或る旅館に入りて、寛々と息はるゝ怪かしさ。是はまあ何うした事とお尋ね申せば、借秀よ私共其方を連れて東京へ行くのは、何ういふ心か大方は知つても居やう。其は右に左斯う事が極れば、其方も暫時の間此地にも分るゝに就けて、是は私が要らぬ肝煎りながら、其方に逢はせたい者が在ると言はるゝを不審しく、妾に逢はせたい者とはと問へば、叫父は呢と我顔を見て、其方の實の母にと言はるゝ。彼の眞實の母様にかと妾は思はず叫びて詰寄れば、

顔きて、逢はせて呉れなと呉々も言はれたれど、何うも此儘に爲るもい
 ぢらしうて、此處で降りたも其が爲め、逢ふて來ぬかとあるに、妾は飛
 立つばかり嬉しく、其實母様は何處にと問へば、是より一里餘北へ行き
 て、なにがし村の西源寺が其方の母の縁付いた家、其を尋ねて名乗つた
 ら、嗚かし喜ぶ事であらう。
 嬉しや三歳の時に分れてより、一度も逢はぬ母様、お顔も知らず、生死
 の程も知らず、居給ふ處も知らずに居たに、今日といふ今日は逢はるゝ
 事かと叔父の前に手を仕へて、重ねくの御親切忘れませぬと禮言へば、
 何の禮が要らう、是から直に行つて來よ、我も共に行き度いなれど、然
 うしては事が面倒なれば、此家で其方の歸途を待つと爲る。往復を車で
 通し、今宵の流車に間に合ふやうに屹度還つて來て呉れよ。お光殿も永
 の年月戀ひ慕ふて居つらうもの、必ず一夜は泊れとは言はいてか。然し
 先には夫もあり、其人との間に子供も有るとの事、其への手前にも、決

して泊つて來て呉れな、互に遠ければ少しは忘れてゐたものを、惣にい
 ぢらしい事を爲せて呉れたと怨まるゝは此叔父が覺悟の前なれば、せめ
 ては一目逢ふて、前爲たて満足して、必ず直に還つて來よと呉々も言は
 るゝに確と腹を極め、其んなら行つて参ります。
 時は師走の初つ方なりき。今朝より曇りし空の、旅宿を出る頃しも片々
 と降出し雪に加へて、北山風の風は身を切るばかり冷たさに、妾は曠の
 黒縮緬の紋付着て、島田は昨日結ふたばかりの襟元寒く、シヨール引纏
 ひたる身を凍めつゝも、幌のうちに心は轉なれど、知らぬ途ゆゑにか車
 の行く事遅く、車夫は折々立止まりては寒さを獨語くこそ悶かしけれ。
 酒代は何程でも興げやう程に、急いで行つて下されと顔を差出して見れ
 ば、然りとは心細や、何時の間にか山も森も一色に降積りし雪の悪らし
 さ、是では隙取るも無理は無けれど、疾く行けかしと念ずるのみ、他の
 事は夢中なり。さても今斯く飛立ちて逢ひたしと思ふ妾の母様は何のや

うな御方であらう。御年も大方五十餘、髪には霜も交つてござらう。思ひも寄らず妾が尋ねて行たら、何程驚かるてあらう、逢ふた時には何から御話爲うかと、一概に夫のみ思詰めてゐるうち、早其村の口に着きしに、車夫して西源寺を尋ねさすれば、一筋途を右へ切れて、大さな榎のある寺と教へられぬ。胸は霧の寄するが如き心地して、心を空に差覗けば、雪はいや増しに降り切りて、黄昏時の風はいと烈しく吹き出でたるに、車は雪途に曳留みながら、やう／＼に迎り着きたる彼の寺の門前にて妾は降立ち、直に内に入らむとはせしが、不圖心着きて車夫を呼び、此御寺にも光様といふが在なさるかと思ねさすれば、廻て返り来て、如何にも其人は在なさりますとの返事。やれ嬉しやと庫裏に馳入れば、彼方もゆくりなく名を尋ねらるゝが訝かしとや、其處の口に立出で、お光は私でござりまするが、何方様かとしげ／＼私顔を見てゐらるゝ。妾を子とは知り給はじ、十四年も隔たりし對面、母様と聲限

りに呼懸けたけれど、見れば其後に立つ男の子、夫にも、寺男にも心置かれて、シヨール脱捨て衝と寄るまゝに、人には知らさぬ忍音、母様……と跡は胸迫りて氣も遠くなれば、彼方はえゝと膝の上なる手をこらせ、物をも得言はず我手を取りて……

志のび音終

質 の 説

昔、やんごとなき際の築垣を越えて、夏來にけらし御衣を白妙の銀に代へ奉りし者のありけるより、世には下々の上を學びて、俗こそ質屋といふ渡世もぞ出来にける。そも、元日の火燒斗豊に羽織の皺を治め、花の下の小袖に村雨の色を添へけるより、懸て綿抜の袂に橘の香をなつかしみ、透綾上布の薄さは空蟬の世のかごとがましや、秋は心なき身にも素裕の懐を寒がり、冬は酔覺の夜更けて襦袍の襟垢を悲しむ。是等の趣たゞかりそめに移りかはれど、其時々自然にかなひたる質の情はありけるをや。汗を明智の妻の律義なる、然もあらぬ事にかもじ屋の看板を尋ねまはり、紀有常が妹子は晦日の夜の使を辛しとや嘆きけむ。佐野のわたりの雪の夕暮、其處には袖うち拂ふ質屋も無しといへば常世が心盡

しも理なりけれど、伊勢の御か家を賣るまでも斯くと知らて過されけるこそなか／＼にわりなかりけれ。然りや人質といへば戦國の習慣、親兄弟も敵の中につかはし、言の質は武夫の刀にかけてもと勢ひけるぞや。爰に此の道に入りて合羽は冬の物蚊帳は夏の道具と合點し、羽織の紐を外して懐に忍ばせ、紙入の服紗もながしの足と數ふるにいたれば、此の人の心づかひ何時も優にて、譬へは唯今百萬の兵寄せ來るとも、樓門に上りて琴を彈する度胸はあるべし。然れば益春二季の戰場を見るに、黄金の指環帳場格子の内にくるがり、夜光珠の光も篋底に埋れ、時計は十字の細目に逢ひて、終にセコンドの息を絶えたるなど、何れあはれに果敢なからぬは無く、又恐しきは四個月の期限にて、今年は二十十日の暴も無く、權現堂堤無事と聞くものから、唯一の物具と頼みつる外套あへなく流失せけりとの報に直と采るゝもあるべく、或は利上の關を越ゆべき手形もあらで、腰に指したる煙草入と少時は生別の悲みを見るもあ

れど、兵は疾きを尙べば、またく間の工面に紳士が不時の泣顔も潰さず、其日暮しの命を取留むる功特は實にありがたき慈とこと覺えけれ。凡そ世の中の物皆價あり、貴きは下和か壁の七十五城に及び、廉なるは紙屑の一籠一錢にいたるまで、夫々の品を定めて春の宵の手に採られぬも、人情の形なきにも、幾何の正札を附くる等、何れか人の世のねうちにあらずやは。然るを質といへば一概に卑み、唯身のまはりの物を懸命とのみ思ふは、天地自然の理を辨へずて、あたら質價も白河や、其春秋の物の哀を他所に過ぐるに等しと、向ふ横町の叔父さんといふが、したり顔にぞ語り侍る。

質の説終

停車場

其一 西那須野

小山！ 小山！ と驛夫が慌しげに呼んで行く聲も今日の寒さに慄えてゐる。丁度二月上旬の事、上野の午後六時發の列車が此處へ着いたのは、夜も十時を過ぎた頃である。都ては雪も消え、梅の噂も徐々聞える頃であるのに、此邊は未だ冬の最中で、宇都の宮を出る時から處々鹽を撒いたやうに見えた残雪が、やがて風呂敷程に成り、幕のやうに成り、鹿の子斑の山は半面白く成つたのが、終に野も島も一色に白く成つて了つた。三等室の寒威は今が絶頂で、人は何れも身を固くして慄いてゐる。霜に曇つた硝子窓から停車場の構内を見れば、燈火の影も青褪めて、最早乗

客も無い待合は寂寥として眠れる如き有様。

「寒〜」

我知らず呟いて、自分は外套の襟に首を埋める。途端に入口が開いて、頭ひながら入つて来たのは、年齢十三四の小僧であつた。蔦色の毛糸の襟巻を頭から冠つて、筒袖の中へ手首を入れたまゝ、バタバタと自分の傍へ来たが、直前の明いたベンチへ淋しさに腰を懸け、

「寒いなあ。」

と言つて、誰か對手にでも成つてくれるかと思ふらしげに四邊を見回したが、一人も應ずる者が無いので、振返つて自分の顔を見上げながら、

「寒うございますね。」

と慄々言ふ。

「アゝ寒いね、お前一人かな。」

「然うです、一人て歸るのです。」

好い對手を待たので、彼は向直つた。

「何處へ歸るんだ。」

「西那須野です、停車場から一里ばかり奥なんて、是から歸るんです。」

「夫は大變だな、西那須野へ着くのは十一時頃だらう。」

「否十一時少し過ぎます。」

「それから一人て家へ歸るのか。」

「然うですとも、西那須野なんかで人は降りるもんですか。」

自分は大膽な小僧の舉動に少しく驚いた。

「淋しからうね。」

「えゝ随分淋しうございますよ。けれど家へ歸るんだから、」

彼は嬉しげに言ふ。

「小山へ用達にでも行つたのか。」

「奉公に行つたんですけれど、餘り酷い目に使ふから俺は家へ歸るんだ。」

家でも使はれるけれども、他所よりは少しは面白からう。

「何屋へ奉公したんだ。」

「鍛冶屋。」

と答へて、彼は寒さうに水漬を吸込んだ。

「お前の家は商賈を爲てゐるのかい。」

「俺の家は百姓です。」

言語のハキ／＼爲てゐるので、中々氣の勝つた者だといふ事が解る。

「然し奉公が辛いと言つて歸つたら家で叱られるだらう。」

と言ふと、突然彼は黙つて了つた。而して思ひ出したやうに窓の外を見る。自分は要も無い事を言つたと今更可哀さうに成つたので、

「否然し辛棒しても効の無い處にゐるよりは、家へ歸つて働いた方が可からう。」

「然うです。」

彼は勇み立ち、

「然うですなえ、俺も家へ歸つたら然う言はう、屹とお父さんが叱るけれども、然う言へば可いんだ。本當に小山の鍛冶屋は酷いんですよ、

飯だつて碌に食はせないんだもの、俺は働くのは何でも無いけれど。」

不圖涙組んで、

「餘り酷いから歸ると言つたら、二月の給金だつて汽車代を呉れたんです。初めは歩いて歸らうと思つてゐたんですけれども、親方がお金を

呉れたから汽車へ乗つて行くな、汽車は疾いもんですね。」

「然うさ。」

「旦那は何處へ行くんです。」

「仙臺まで行くのさ。」

「ア、然うですか、仙臺は大變賑な處ですつてねえ、叔父さんが話してゐましたよ。俺も將に仙臺へ行かうと思つてゐるんです、十八に成つ

「たら、きつと行くんだら、
「お前今幾才だい。」

「十四です。」

と答へたが、

「ア、眠く成つた。俺は睡やう、旦那西那須野へ着へたら起して下さいな。」

「可、々。」

と受合ふと、忽ち腰懸の上へ横に成つて、二つ三つ欠伸を爲るうちに何時かスヤ／＼と眠て了つた。

寒氣は段々に激しく成つて、足の瓜先が痛みを感じるまでなのに、腕を組んだまま樂々と眠てゐる小僧は、何んな夢を見るのであらうか。

飽迄無邪氣な加之恐を知らぬ斯んな小見を、都へ出して教育したならば、定めて將來は一麻の役に立つてあらうに、此儘に捨て、置いて、何にも

仕込まずに置いた日には、末恐るべき者に成つて、彼が村の人々に爪弾を爲れるやうにも成らう、與へたいものは教育だと、自分は其眠姿を眺めながら一人熟々と思つてゐた。
甦て幾かの驛を過ぎて、此次は西那須野、自分は猶豫なく眠がる彼を引起した。

「今起るよ……今……。」

澁々眼を擦つて咬いてゐたが、甦てパツチリと見開いて、

「ア、もう西那須野へ着いたのですか。」

「否今着く處だ。」

「然うですか、有がたうございます。ア、寒いなア、是から一里行くんだ。」

とブル／＼爲ながら起揚つて襟巻を巻き直した。

「西那須野！ 西那須野！！」

驛夫が寒さうに駈けて行く。彼は慌だしく出口に飛んで行つて、物馴れた様に窓を明け、首を外へ出してゐたが、聽て外から戸が叩くと。振返つて自分に向ひ、

「旦那様なら。」

言すて、寒い暗い夜の中へ飛降たが、硝子越に其方を見送れば、首を縮めて手を筒袖の中に引入れ、何處で覺えたのか、楠公の歌を聲張上げて諸うて行く。

其二 赤羽

其あたりを銃獵したる歸るさであつた。餘り重からぬ獵袋を擔うて、一人停車場の待合へ入つたのは彼は夕の六時である。

上りの列車が着くまでは未だ二十分程あるので、人も多くは待ち合はせぬ。夕暮の風の寒さ。膝を抱えてゐる其淋しさ。

勇ましい掛聲で、腕車が三臺入口へ着いたが、聽て優しい足音がして、

小聲に話しながら入つて来る者があるので、自分は不圖見ると、十七八位な處女が三人。服装も普通で、何れも縮緬のも高祖頭巾を冠つてゐるが、舉動から格好まで並々ならぬ美しさであつた。

何者であらう！ 自分は奇を好む眼で其方を打目成つたが、彼等は衝と待合の隅へ陣取つて、實に睦しげに秘々と話してゐる。

此界限の良家の娘か、其にしては少しく粹な作。然ればとて織物の工女とも見えぬ。田舎藝妓では無論なからう。女學生か、否々其様な類でも無い。

何者であらうと類に考へたが、何うも談さへ低聲で解らぬので、一向に思當る節も無い。斯んな淋しい場所、男が女の舉動を物ありげに眺めるのは決して立派な所爲ではないから、自分は可い加減に此物數奇を止めて、他の事に心を移した。

其うちにやう／＼時間も切迫してくる。人が五人十人と集るので、終に

其騒に隔られ、薄暗い隅にゐる三人を見る間がなかつた。切符を賣る口が明いて上野行と書いた札が出ると、多勢は争ふて其處へ押かけた。自分も銃を提げたまゝ人に押されて其場へ行つたが、切符を求めて出やうとする時不圖返ると、先刻の女のうちに、一番年嵩に見えた一人が、我後に續いて切符の口に立ち寄り、

「上野を一枚。」

と言ふのであつた。ハテ然すれば汽車に乗るは一人で、他の二人は見送らな。斯う思つたが、人に押されて自分は又離れて了つた。

何者だらう、其様子から見れば娘では無い、女學生では無論無い、工女でも無い、藝者か……何うか然うても無いやうな。

聽て汽車が着いたので、今度は皆プラットホームへ出る、出て来る人、入る客、戸の明く音、閉る音で、少時は何事も解らぬ。自分分は取敢ず、中頃の一室へ飛込んで、明た席へ腰を下したが、此時車外

は最う十分の夜の所で、風は裏の山に當つてブー／＼と鳴つてゐる。不圖見ると、つい隣の車室の窓下に、先刻の見送りと愛えた女が二人佇すんで、例の如くいと低聲で、中にある處女と何か話してゐる。而して話しながら、二人は同じやうに袖を顔へ當て、は潜々と泣いてゐる様子。

何者だらう、自分は又考へた。藝者か然うても無いらしい。酌婦か……何うか然うても無いやうな。

上野へ着いた時、今一度逢ふかと思つてゐたが、彼處の混雑では終に其姿を見ずに了つた。

其二 藤澤

「オイ少と話でも爲たら何うだね。」

美しい八字髭を蓄へた一人の男は、怠屈のあまりに雑誌を讀んでゐる其友を呼んだ。

汽車は今藤澤近くへ来たのである。

「好い天氣だね。」 と爲う事なしに其需めに應ずると、

「何、其だけかい、餘り現金なものだね。」

「だつて話説といつても突然に然うは出ない。人の家を訪問するにも、席に着いたら先づ今日はとか、又は結構な天氣ですとか、悪いものが降りますとか、序開きは大概極つたものだ。」

「成程な。其では其つもりで挨拶を爲る事に爲やう、戸部田君、而し其からの御用は。」

眞面目に成つて言ふ。

「御用は貴方から少と談しても爲に參れとお招きにあづかつたのです。」

何の御用か此方から伺ひまじやう。」

「是も悪かつたかね。夫では貴方は當年お幾才にお成りなさる？」

「年齢をお尋ねなさるからは大方女房でもお世話下さるのですか私には

當年三十才、星は……。」

「七赤のうちでも夜這星とやら、夫て性は氷性で浮氣ですか。」

「何もかも御存知であらつしやる。亥の年にして向う見ず、尤も母は成年の生れなれば、其氣を受けて能く吹るか。」

「父親は申て氣が早く、年中夫婦喧嘩の絶へた事も無かつたつけ。」

「某間に出来た子でありながら、生來暢氣なる事丑の如く、酒を見て涎を流す事彼の八岐の大蛇に似たり。」

「へエ君は其様に酒を呑むか。」

「否是は君の身の上。」

「馬鹿に爲るな。」

二人は聲高く打笑ふので、一人旅行の茫然と腕を掛いてゐた自分も、其可笑しさに思はず噴飯して了つた。

「だが宇佐美、斯うして旅行に出て見ると、家の事などは全然忘れて了

ふから實に面白いわね。」

といふと、一人は彼の髭を捻りながら打額さ。

「然様さ、お互に家にゐる時は四角張つて無駄口も多きは言はず、外へ出れば又然様然らばて通さなければならん處もあるが、氣樂の遊山には那樣事を捨てるのだ。」

「萬事馬鹿氣た處が保養さ。然し是も一人では誠に氣が詰つて可かん。」
「薄々の酒も茶よりはました、旅は道運、君でも支那靴よりは相手に成る。」

「是は猛烈だ。此方が支那靴なら其方は。」

「何てすな。」

「詰更の正宗か。」

何れも旅の癖さ嗜し、勝手な事を言合つて笑つてゐる。自分も此人々と同じやうに、今朝の六時に新橋を出て、急行大阪に向ふのである。用と

言は、歸省の途、半分は遊山で、折から花の咲く春の頃を嵐山へも行かう、芳野へも、日永の一日二日は奈良にも錦を曳かうなど、他から見れば随分樂なやうではあるが、長い道中話對手といふは無し、唯一人で停車場の敷を練つて行く淋しさ。まことに旅は道運、此人達が羨ましいのである。

「何うする、直行して丁ふか。其とも途中で降りるか。」

「何方でも可いが、君は一刻も疾く行きなからう。」

「何有。」

相見ても極めて眞面目を装ふ顔が、可笑しさを堪へてゐるのである。

自分は何と無く其が見え透いてゐるやうに思つて、猶且同じやうに眞面目に微笑んだ。

汽車の運が漸く緩くなると、

「オヤ藤澤だよ。」

二人は立つて窓を明けたが、此處で降りるのでは無くて、何か買物を爲ると見える。聽て汽車が止るとベルの音が停車場の構内に響き渡る。其處此處の戸がバタ／＼と明く、降りる人、乗る客で、少時は雜然たる物音。

自分は別に用事も無いので、戸外も見向かず疾く汽車の出よかしと待つてゐたが、やがて笛の音がして、ガツタリ重い足でも揚げるやうに揺き出すと、夫から汽車は歩み出した。

茶の土瓶と酒を買得て、例の二人は此時満足らしげに席に着いたが、

「先づありついたな。」

髭のある方が燻の口を抜きにかゝる。

「東の間の口塞か。」

對手は土瓶の針金の蔓を食指に引懸けたまゝ、昵と其を眺めてゐたが、

「オ、然ういへば今の二人連を見たか。」

「二人連とは、何の？」

「インパチスを着た丈の高い男と、夫から葡萄酒の小紋の羽織の若い女と。」

「ム、見た／＼、所謂才子佳人だつた。」

「彼は少しばかり僕も知つてゐる人間さ。」

「エ、詰らん事を自慢に爲るな。彼等の知己だからといつて君の男振が揚る譯でも無い。」

「自慢に爲る事は無いが、知つてゐるから知つてゐるといふのだ。彼はね、僕の家の後に今度新築した二階家がある。君も知つてゐるだらう。」

「ホー。」

「彼處の主人さ。」

「今の二人が？」

「撥げた。」

漸く燻の口が取れたので宇佐美といふのは顔を

「昨日彼の細君を迎へたばかりさ。新華族の跡取りで、去年洋行から歸ると忽ちにして邸を造る、同時に妻君を迎へたといふ筋だ。」

「ハ、ア、君の近所には居さうも無い人種だな。」
「馬鹿を言へ。」

と戸部田とやらは少し考へたが、

「成程、新婚旅行で昨日は江の島あたりに遊び、是から函根へても行くのだらう。」

「後から行つて石でも打付てやりたさうに見えるぞ。然し幸福なものだな。」

「食祿名譽身に餘り、猶此幸あり、羨むべし、羨むべし。」

「止せ、外聞が悪い！ 其様な事が羨しいやうなら、一月も鐵道の驛夫を爲したら世を果敢なんて轢死でも爲るだらう、外見の通りに果して幸福であるか何うか知れたものでは無い、而して。」

「解りましたよ。」

秋から金扇製の洋盞を出し、一個は出來の茶椀で、互に酒を酌交はしながら。宇佐美は又口を開いて、

「だが先方も二人の新婚旅行、此方も二人だから似たやうなものだ。お互に迷は女だと思つて見ればなあ、而して此方が虚飾も入らず氣も置けんから、第一色氣の無い處が風流だ。」

「其ては僕は君を女だと思ふのだな。」

「左様さ。頼もしい女房だらう。」

「頼もしくも有がたくも無い。」

「お互さままで。」

一度に大笑して又溢れる杯を揚げたので、自分も三度釣込まれて笑はせられた。而して此人々より更に不満足な淋しい自分が、彼の新婚旅行を見ずに了つたのは、大に謝すべき廻合せであると思つた。何だか知らぬが然う思つた。

其四 新橋

「掏兒だ！ 掏兒だ!!」

田舎者が駆けて行く。其前には大勢の人が小走りにプラットホームを歩いてゐるので、掏兒とも目ざす者は其中に紛れ込み、彼の被害者たる田舎者の他は誰にも知り得ぬのである。其後には、

「エ、掏兒？」 「掏兒ですか？」

言傳へて多くの人が、逆もの急ぎ次手にバラ／＼と走るので、やがて田舎者の姿も何れと分らず成つて了つた。

散々に皆停車場を出る。

「掏兒は捉まりましたかね。」

「然うらうござります。」

と云ふ聲が諸方から聞えたが、彼等と同じ汽車で着いた人は、先に熱心に追蒐けたに引變へ、査公に捕へられた賊と、其田舎者を一人も踏留ま

つて觀やうとも爲なかつた。餘り忙しい中には、變つた事のみが其まゝに取残されるのである。

其五 黒澤尻

宇都宮を越え、白河を越え、郡山、福島、岩沼、仙臺と長の道程を後にして、九月も末の方、都の夏はと忍ばれながら、雨の日暮に着いたのは陸中の國黒澤尻驛。

「鮮に饅頭……麥酒に葡萄酒に新聞は如何……。」

とやうく東北の音に成つて、幾度か驛々に繰返さるゝ度毎に、其心細さが身にしみて来る。奥へ進む程乗る者は少く成つて、斯處斯處で稀に降りる者も度重なれば、やう／＼に同室の人数も減つて了つて、残る者は盛岡と極つたやう。用も無い間の宿は假寐の夢に過すので、五六脚づゝ腰懸を隔て、一人、二人、三人、四人、何れも小くなつて身を横にしてゐる。

最早着く頃と手荷物を纏めて、帽子を冠つて、傘を持つて窓外の空を見上げると、濕々雨の北は少しく晴れて、星が散ほら輝いてゐるのが、如慙中にせめてもの心強さである。是から降りて、明日行く方は彼あたりと其のみ一心に考へるうち、笛が鳴る、響て信號の燈火が見る／＼近く成つて、目ざす黒澤尻の町が目の前にハタと止まつた。急いで戸を明けて身輕に車外へ降立つたが、久しく腰を懸けたまゝであるので、足がフラフラと踏度も無いのに、荷を擔ぎ傘を持つた身は、思はず勢につれて二三間前へ走つたのである。驛の名を呼びながら、驛夫が戸を開閉するので、自分の外に二人や三人の連もがなと振り返つて見たが、淋しいかな一人も降りる人とは無く、未だ夏ながら薄寒い雨に傘を翳すなる袖は何時しか濕つてゐる。踏む土に音も無く、橋内から一目に見ゆる町の口には人の往來も絶へてゐるのて、唯聲高に響くのは停車場の電鈴のみ。

右左を見れば何れも岡と森であらう、而して明日の旅路の方角には星のあたりに聳ゆる山が黒くどろに連つて、低く垂れた雲に續く。何と無く胸を押へられるやうな氣がするのを、我と嘲笑つて、溜歩して出口へかゝると、其處には改札係が一人、是も眠さうに扣へてゐたが、黙つて切符を取つて、押出すやうに柵の戸をハタと閉め、其まゝノイと内へ入つて了つた。

途端に汽車が出て行く。

長い馴染に決別するやうな氣が爲て、自分は足を止めて振り返つた。而して斯かる長途を運ばれた恩と、暖き室に寝つき起さつした恵を感謝するにつけ、名残惜しさに涙さへ零れた。

「〇〇屋でございます。御案内致しませうか。」

聲を掛けられて氣が着くと、宿引が一人提灯を差出して立つてゐたが、別に争ふて客を引く對手も無いので、今時分に突然と出て來たのであら

う。
自分は黙つて荷を渡し、而して彼の後に随いて歩いた。旅館は直に此正面で、ものゝ二十間とも離れてゐるのである。廻て店へ着くと、

「お客様！」

勢も無く呼ぶと、

「ハイイ。」

同じく意屈らしい應を爲て女中が出て来る。其店先を上る時不圖思つたのは、あはれ自分は何たる氣の弱い者であらう、よし彼の繁盛な都に居て、人の浪に揉まれてゐても、心から言を交はす者としては、常に多くは無いものと。

停車場終

音 樂

大空の星と見擬ふばかり耀きたりし銀燭も大方は消えたれば、堂の内は微暗き夜と成りぬ。暖爐には灰のみ白く、床には冷かなる氣の横れるに、數百の人の喝采歡呼に汚れたる空氣を去らしめんとや、有る限りの窓は開放たれしかば、外面の風は此處より吹入りて縦横に馳廻りぬ。こは今の世に名高き某嬢が催せる音樂會の跡の様なり。
一時前までの妙なる樂の響と、懐深き聽衆の口より出づる靜なる吹と、曲の終毎に起る急激の如き拍手とは、今や其の反響だに留むる事なく、唯窓の外より吹入れられたる木の葉の五つ六つ床の上を飛ぶのみ。其の一片は廻て正面なるピアノの上に乗ると見えしが、怪むべし、其の茶褐色に乾びて醜くも縮みたりし身は、忽ち廻りて、細脈には根より吸ふな

る。鶯聲分限り、色さへ漸く鮮かに成りて夕日の影に濃き黄色と成りしが、猶それにも止らずして、見る／＼緑のあたりより燃ゆるが如き紅を染出し、又其色の褪せ行くまゝに光耀く緑を成して、終には二月の春の若葉に返りぬ。愆ての後彼を見れば、今ぞ知りぬる、これは櫻の葉なりけり。彼は自ら其姿を眺めつゝ、手を振り足を動して、此喜を夢かと疑ふ氣色なりしが、戀て夢ならぬを知りつ。姿變りしは彼のみにあらず、椅子の上には落ちし木の葉も同じやうに成りたればなり、それこそ梅桃なども枯葉なりしか。あゝ何等の不思議ぞ、と櫻の葉は驚喜のあまり口を開きて、我等は今少年に返りぬ、老たる友も皆若やぎぬと言へば、他の者も互に其態を見て、肩を拊ち腕を引き、こは何事ぞと同音に叫べり。皆若葉の戦ぐらん聲音なり。

時は今秋の半なるに、我等は一度稍を離れて又昔の身とは成りぬ、我は花の後に芽みし時の心地とする、そも／＼此處は何處ぞと櫻の間ふ。

汝の立ちたるは奇しき音をなす樂器の上にてこそと、良ありて下なるものは救へつ。

さて我も思ひ出しぬ、人のする音樂を聴きたりと覺えしが、彼の妙なる音色は我等が心と姿とを變へけるよ。然らば驚くべき音樂の力かなと桃の葉は軽く身を起して、實に死より呼返す術もありけり、我等は今より此の僥倖によりて春を檀に爲むとするに當り、彼の某に感謝せざるを得ず、皆起ちて其徳を稱へむといふに、木の葉等は齊しく彼の女神の徳を褒めたり。恰も其人の春にも似たる樂しき戦ぎの聲にして。

愆て彼等は其の贊美にても足らじとや、ピアノの上に這登り、手を組み聲を合せて舞踏りつ。何時までもと興じ狂ひしが、如何にしけむ櫻は忽ち眉を皺めて、罷めよ我友、我等が足の下に怪しき音の爲るにあらずやと啼くに、皆驚きて静りたり。其聲はピアノの内より起る響きなりき。細き聲してピアノ云ふ。木の葉等よ何をか喜ぶ。何をか喜ぶとや。彼

等は一同に打笑ひつゝ、我等は今斯の如く若やぎたり、我等は人に感謝し、又君にも感謝せざるを得ず、げに大なる恩恵に浴せる哉。然れどもそは彼の人も我も知らざるところなり、とピアノは一楮高き聲もて答へたり。

知らずとも我等は喜びて徳を稱へなむ、世に音楽の如く靈妙なるは無し、彼の人の如く美しき音楽家はあらじ、而して又我等の如く多くの恵を得たるもあらざらんを、と木の葉は熱心に語れり。

否々そは汝等のみにあらず、死せる凡ての物は皆音楽に廻るなりとピアノは答へつ。木の葉は驚きて、然らばなど世の人の音楽の聲を集めて大砲の如く天地に轟かさむとは爲さるぞ。愚なる輩かな、命は一時なり。

否、如此くむば命は無窮ならんと皆勇ましく抗ひぬ。

心して聴け。強音なるピアノの言ふやう、全能なる神も、汝等を若葉に復さむと約束は爲たまふまじきと、唯此處に人の業は時に神の目を偷み

て、大なる運命の力に抗はんとする事あり、汝等は其偽の力によりて少時運命の網を潜るのみ、恰も病みたるもの、悶へ轉びて若みを寛めんとするに似たり、然れどもは更に一倍の苦痛を齎し來らむものぞ、快樂は其者を現在の位置より他に移さむとすれど、其ものゝ重さに堪へずて、聽て舊の處に投げ返すなり。

然らば我等も目前に枯葉に復るべきかと木の葉は氣遣はしげに問ふ。

あはれ今も枯れたる葉なり、唯其まゝに朽ちん。

いかで、汝は偽を言ひて人の幸を阻はんとは爲るぞと、皆爪弾して罵り騒ぐ。

何の阻ぞや、汝等は酔の醒めたる後反りて我等が與へたる樂を阻はんのみ、我は誤られん事を恐るゝが故に要なき事をも告るなる、音楽は種々なる音をのみ耳に傳へんとす、然るを生けるものは开を直に心に聴き、老むたる者も激める血をば音のまに／＼鞭ち馳せむとするが常なり、然

もやがて血の循環の鎖らは、再び凝みて動かずなりなを。慙て少時の夢より覺めし時、或者は其影を追はんとし、或者は其興を罵するに到らん。汝等が今の幸運も汝等を稍の托葉に返さむとは爲さるべし、やがて空しく床の上に落ちて、明日は掃除人の爲に暖爐の中に投入られむまでなり。

あな思はしや、我等は慙る憎き事いふものと共に在るを好まず、と聽さるたる輩は一同に叫びぬ。

然らば其も可からん、我も人の快樂を嘲るが如き正直なるものにもあらねばとピアノ高く笑ひぬ。

木の葉は此時臺の上を去りて、窓の邊を狂ひるたりしが、有紫に己等の行末を恐れてや、窓の外に行かむと語ひて、又吹く風に駕りつゝ片々と闇の裡に飛出てぬ。

慙て夜も更け渡れば、窓は閉され、一つ二つ残りし燈火も消えて、音無

音　　樂　　終

き樂器はいつまでも熟睡を續けぬ。外の面には此時野分吹荒びて烈しく窓を鳴らすまゝに、はらくと來ては訪るゝものあり。

是を彼の落葉が、失ひし束の間の樂を忘れかね、再び其命を求めむとて、身を入るべき窓の隙間を彼方此方と尋ねるにぞありける。

子　の　思

「石川！　居るかい。」

廊下を駆けて来る足音がして、續いて荒々しく襖が明くと、飛白の筒袖の綿入に、同じ羽織を着た愛らしい少年が、驀然に書生部屋に躍込んだ、是は國枝家の惣領で、名は登といふ今年十二歳の腕白盛である。

六疊の部屋には桐の真黒に成つた書籍函と一閑張の机を控へて、書生の石川といふのが今しも雑誌を讀んでゐたが、此物音に驚いて振り返る。

「石川、僕は……。」

と登は何か言はうとして火鉢の前に来たが、忽ち火の氣の無いのを發見して、

「寒いのに何故火を起さなすの。」

「否、寒くは無いです。」

「寒くなす。」

登は酷く驚いたが、

「嘘々！　其様な事があるものか、僕は丁と知つてる。君は寒いのを我慢してゐるんだよ。然うだらう。」

「何有、體の好い者は火に當るに及ばんです。私などは。」

石川は

苦い顔を爲て肩を聳かした。

「だつて君はガタ／＼してゐるぢやないか。僕は體は好いけれども、猶且冬に成ると寒いよ。其りやあ遊んでゐる時は少しも然うじやないけれど、夜だの朝だのは體が慄えるんだもの。而うして衣服が厚ければ

可いが、君のやうに薄つぺらぢやあ何うしたつて寒からうと思ふな。」

直裁と言ふので、石川は思はず赤面したが、やがて昵と此無邪氣の少年

を打目成つて、

「登さん。貴方は能く気が附きますねえ。誰だつて其通り人間ですもの、寒も暑も同じやうに感じますよ。」

「ソーラ見給へ、僕は違ひないと思つたんだ。夫ては何故火を起さないの。」

「私の身分ではね。其様な贅澤は出来ませんからな。」

「フム」

理由は解らぬが、登は口を嚙んで考へ込んでゐる。

「私が贅澤な事を爲ると、貴方のお父様に叱られます。」

「然うか、其じやあ可い。待ち給へ僕が今持つて来てやらう。」

と起上つて出て行かうとするので、石川は慌て、押し止め、

「可けません。其様な事を爲ると今度は貴方が叱られますよ是で澤山です。」

と火箸で搔廻すと、螢火程な團炭が奥の方から漸く顔を出した。

「ア、斯んなに有りました。最早澤山です。」

「其丈ぢや可かんよ。待ち給へ。」

何と言つても聞かずに室を出て了つた後を石川は頼もしげに見送つて、

「此處の家の神様だ。」

と呟いたが、やがてものゝ五分と経たぬうちに、例の勇しい足音が爲て、

登は満面得意の色で引返した。見ると両手に山のやうに佐倉炭を持つて、

來たので、石川は今更驚き呆れたのである。

「ソーラ是丈ありやあ可いだらう。」

登は新聞の上へ打明けて、

「お鶴と僕は喧嘩してやつたんだ。書生部屋に炭なんか入りませんつて

言ふから、石川が使ふんぢやない。僕が蜜柑を焼いて食べるんだと言

つたら、蜜柑なら彼處で食らなかつたつて可うございませつて言やが

るんだもの。」

「何故其様な事をなさる！ 可かんと言つたら止まなければ可けませんよ。」

「だつて……夫は僕は可いと思ふな」

と懐中から蜜柑を三個四個出して机の上へ並べ、

「ツア君も食べないか、京橋の伯父さんの處から年玉に呉れたのだ。」

「私も頂戴しますが、今は澤山です。」

「然うかい。」

登は皮を剥ぎながら、炭の烈々と起つて来るのを面白そうに見てゐたが、不意に顔を揚げて、

「石川、君は故國にちッ母様があるのだつてねえ。」

「ハイ母はあります。」

「お父様は死んで了つたの？」

「父は私の丁度貴方位の年に死にました。其から母と私と二人ぎりでのたつてますが、私もね、實は一人の親を残したまゝで遠方へ出てゐるのは可厭ですけど、然うしないでは學問が出来ないし、其に母が其様な氣の弱い事では可かんと云ひますので、斯うして其方に御厄介に成つてゐるのです。」

「然うですか。」

登は氣の毒さうな顔色で、言まで改つて来る。

「其じやあ、貴方は東京で學問を勉強して、然うして故國へ歸るんだね。」

「ハア母が嘸待つてゐまじやう。」

石川は笑しげに斯う言つた。

「君！」

登は急に氣が着いたやうに、

「君が立派な人に成つたら、此方へお母様を呼んだつて可いんだらう。」

「何うか呼寄せたいと思つてゐますが、自分の體がへ極りが附かないので、未だ急には行きませぬ。」

「僕が大きく成つたら然うしてもげるけれども。」

「登は考へ込んでゐる處へ、下女が襖の外から、」

「坊様、御飯ですから疾くおいてなさいませぬ。」

「貴方、疾く學校を卒業すれば可いね。」

此方は石川に向て熱心に言つた。

「坊様！」

下女は襖を明けて顔を出したので、

「貴方はお耳が遠いんですか。」

「何だうるさー！」

「うるさい處ぢやありませんよ。先刻つからち呼まうしてゐるのが貴方には聞えませぬか。」

「知つてる。」

「そんなら疾くいらつしやう。」

と言つたまゝ立填つて待つてゐる。

「失敬、僕は御膳を食へて来るから、エ、又來ませぬ。」

と立上つて、

「サア、鶴、退かんか。」

「へい。」と體を斜に爲る處を、一つビシヤリと撲つて、

「お出額引込め、鼻高くなれ、ヤアイ。」

と笑ひながら逃げて行く。下女は例の事として呆れも爲ずに見てゐたが、

「眞實に荒くつて仕やうが無いよ。石川さん貴方が智慧を飼ふんだらう。」

「何？」石川は顔を揚げた。

「氣をつけて下さいよ。大事の坊様に悪い事を教へると、私達まで叱られるから。」

「僕は悪い智恵を付けやせん。」
 「炭を取寄せたのは誰の智恵です。大概になさいよ。大氣な家なら構はないけれど、お家のやうな處では、彼様事が解つた日には大變です。」
 と視を閉て、「ドシ〜」と行つて了ふ。石川は返事も爲すに、其まゝ讀書の書籍を擲けて、心細げに又勉強に取かかつた。

二

午後三時、授業の終りを報せる鐘がガラランガラんと鳴渡ると間もなく、宛然蟻の塔を崩したやうに、幾百人の生徒が小學校の門から溢れ出した。生徒は何れも同じやうな制帽で、筒袖に袴を穿たもあれば、洋服のもあり、二三人或は五六人づゝ陸じさうに語らひつゝ、同じ方角に歸るのであつたが、纏て其うちの一團三人の組が門外へ出ると、急に秘々と何か相談して、塀の脇に整立し、一人々々後から來る者を呼止めては、
 「オイ僕等は今喧嘩を爲るんだ、見てゐたまへ。」

と鼻高々と吹聴してゐる。
 「又高等二年が喧嘩を爲るんだとぞ。」
 と顔の色を變へて、友達を促し後も見ずに逃去るもあれば、物好にも態々傍へ立寄つて、
 「喧嘩？ 誰と爲る。弱い奴か、僕が加勢してやらうか。」
 と熱心に聞質してゐるものもあつた。彼是するうちに人に後れて唯一人病身て弱々さうな子が、連も無く悄然と出て來ると、先の三人は待構へたやうにドツと鯨波の聲を揚げる。
 「オイ三浦待たんか。」
 大將らしいのが二つ三つ足踏を爲て、左の肩を聳しながら前に突立つたので、彼の病身の三浦といふのは驚いて顔を揚げ、
 「何を爲るの？」
 「君は、何故、僕等の事を先生に告げた。」

「だつて算術の答を教へると先生に叱られるもの。」「
忤々もので言ふと。」

「そりやあ然うて。」

と大將は又一つ力足を踏んで。然も憎體にベツと唾を吐いたが、

「其りやあ當りまへさ。だけれども秘密で教へれば叱られやせん。ナア
岩井。」

次に居た團栗のやうに肥えたのが躍り出して、

「友に親切に爲るなら。」

「友に親切に爲るなら。」

大將は益肩を擗かして、

「友に親切に爲るなら。」

「何故先生に告げた。サア喧嘩なら來い。」

「僕は知らなかつたから。」

「泣いてゐやがる。」

團栗が面白さうに叫いた。

三番目のが理由も解らず合槌を打つ。

「かゝつて來い。三浦！」

大將は勢に乗じて拳を振上げ、アハヤ此虚弱な生徒に腕力を用ゐやう

とした時、取巻いて見物してゐる多くの生徒を掻分けて、突然喧嘩の中

へ飛込んだのは、彼の國枝の登であつた。

「止たまへ、君止したまへ。」

大將は呼かけられて手を引いたが、此仲裁人の方を見て何も言はず黙つ

てゐる。

「引込んでゐたまへ。」

團栗と三番目の同志が同音に言ふ。

「何うして三浦を打つのか？」

登は彼の傍へ身を寄せて立つた。

「君此奴は失敬だよ。僕等の事を先生に告げたんだ。」

「だつて算術の。」

「黙れ！」

大將が叫ぶ。續いて二人が同じやうに、

「黙れ!!」

「僕は知つてる。」

登は一步進んで、三人を見廻しながら、

「君が算術を教へてくれつて言つたのを、三浦さんが教へなかつたのだらう。」

「然うさ。而うして先生に告げた。失敬じゃないか。」

「失敬じゃあな。」

登が昂然と反抗したので、周囲の見物は面白さうにドツと鯨波を作つた。

「其様なづるい事を爲るから悪いんだ。」

「だつて友達のこと……。」

「君は卑いんだ。」 登は憤激して叫んだ。

見物は再び騒出す。大將は眞赤に成つて、口惜しさうに首を垂れたが、急に決然として、

「何だ金貨の癖に! 君は彼方へ行け。」

突如として罵られたので、何うしたか登はハッと赤面した。

「然うだ國枝は金貨だね。」

團栗が然も氣味好さうに見物に吹聴すると、是に勢を得たか大將は再び攻撃の態度で、今度は登の方へ突蒐つて来る。

「君なんぞは金貨の子じゃあ無いか。」

「……。」

「君のやうな奴は彼方へ行き給へ。」

「金貨の子だつて悪い事は爲ないぞ。」

涙を一杯溜めて、登は唇を噛締めた。

「ハクシヨ! 金貨といふものは、人の金を取るんだ。」

「然うだ。」 例の二人の供が是に和すと、今迄弱い方に同情を寄せてゐた見物は、急に聲を揃へて、

「金貨なんかと喧嘩するな。」

「止さう、皆今日は止めやう。」

打を爲たが、

大將は功者に引上げて、二人に耳

「三浦、今日は許してやるぞ、僕等は金貨と喧嘩なんぞは爲ないんだ。」

「卑怯！」 登も負けぬ氣に成つて罵つたが、其聲は大勢の罵倒に

葬られて、

「金貨。」

「金貨。」

といふ聲が、四方に起るばかり。彼は子供ながら最早前後を忘却して、

對手があらば如何なる事をも爲かねまい權幕に、屹と多くの友達を睨ん

だが、一同は見返りも爲ずに、思ひ思ひに散つて行く。喧嘩の敵手も、

三浦も何時か其うちに紛れて何時へか影を隠して了つた。

「卑怯い奴、喧嘩なら爲るぞ。」

的も無く叫んだが、今まで我慢してゐた氣がゆるんで、登は熱い涙をポ
ロ／＼と零しながら、扉の方へ向いて突立つたのである。

不圖氣が着くと。

「國枝さん何うしたの？」

何も知らずに後から出て來た友達が、此時親切に肩に摑つて尋ねた。

「エ君何うしたんだい。」

登は筒袖の腕で涙を拭きながら、

「僕は聞いて見るから可い。」

「何を？」

「聞いて見るから。」

不意に友達を振離して、彼は一目散に自宅の方へ駆出した。

三四

「どりや」の計算を爲て了はうかな。」

と炬燵から出て、小さな机の前に坐つたのは、園枝の主人剛といふので、年齢は四十五六にも成らう、脂ぎつた猪顔の眼光の可憐い男で、體は固肥に締つてゐる。銘仙の綿入に、節糸の煤んだ縞の綿入羽織を着て、白いランネルの襟巻を巻付けたまゝ、丁と四角に坐つて机の上の帳面を降し、掛硯の蓋を明けながら、何か熟と黙算して尖の坊主に成つた筆を前歯で噛みながら、

「フム然うか。」

と二人で頷いて、瀬戸物の水入を逆に爲ると、一雫ホタリと落ちたきり、

「オイ、お茂！」

と呼んだが返事が無いので、

「誰もゐないか、オイ疾く來い。」

「ハイ唯今。」

と忙しうに勝手許から出て來たのは、主人に似合ず品の良し三十四五

の細君であつた。

「何か御用でございますか。」

「是を見なさい。」

主人は硯の角で水入をコツ／＼叩きながら、

「何度云ふか知れやあしない。大概解つてゐるやうなものではありませんか。」

「水入でございますか。」

「云はずともです。彼程注意して置くのに能く忘れるなあ。」

「誠に疎相でございます。」 と夫の投出したのを取つて立つと、

「私は何うも是が嫌だ。」 剛は呟きながら帳面を繰廣げ、自分の懐

中から覺帳を出して、一枚々指に唾を着けて繰開いてゐたが、

「エー二月十三日と……是かな。」

帳面を動かすと、何時の間にか机の角に置いて行つた水入器が其に觸れ

帳面を動かすと、何時の間にか机の角に置いて行つた水入器が其に觸れ

て下へ落ち、壘の上へドットと水を噴出した。

「コレ！　是は。」

慌て、拾ひあげながら、

「何故又黙つて置いて行くのだ、お茂。」

苦々しい顔を爲て、

「お前幾歳に成んなさる。子供やお鶴とは違ふ。何だつて斯様な氣の利かん事を。」

と振り返ると誰も室のうちはぬぬので、忌々しうに鼓舌を爲て、

「エ、イ何處まで人を馬鹿に爲るんだ。」

と口のうちに呟きながら、又帳面の方に取てかゝる處へ、氣立ましく飛込んで来たのは今學校から歸つた登であつた。父の姿を見ると束々と傍へ来て、頓狂に、

「唯今！」

「エ、驚かせる。少と靜に爲んか。」

「お父様。」

「靜にしる。」

「僕は、お父様……。」

「靜に爲ると言ふに。」　剛は終に「喝して振向いた。

「何故又貴様は然らワイ〜言ふんだ、今お父様は調物を爲てゐるのだぞ、用ならお母様に言へ。」

「夫ぢや可けないのです。僕はお父様に聞きたい事があります。」

登は逸越して聲の調子まで變つてゐる。

「何だ、貴様は顔色まで變へて……何うしたといふんだ。」

「あの……金貨といふものは。」

「何だと。」　剛は驚いて目を丸くした。

「お父様金貨といふものは悪い者ですか。」

「馬鹿奴、お前は何をいふんだ。金貸？」

「今日僕は聞いたんです。金貸は他人の金を取るんだつて。今にも泣出しさうな顔色で、登は一生懸命に言ふのであつた。剛は其顔を熱々と打目成つてゐたが、

「登、お前は何處で其様な事を聞いて来た？」

「學校で。」

「誰に聞いたのだ。」

「倉田といふ子に。」

「何うして又倉田といふ子が其様な事を言つた。」

「其は……。」

と登は少し躊躇つてゐたが、

「僕と倉田と喧嘩を爲たんです。倉田が自分が卑い事を爲ながら、三浦といふ弱い子をいぢめてゐたから、僕が三浦に加勢してやつたら、倉

田が。」

鼻聲に成つて、

「倉田が僕の事を、金貸の子なんか彼方へ行つてゐると言ふんです。」

「フーム。其だけか。」

「然うすると、多勢見てゐた者が、皆で金貸々々つて言つて笑ふんです。

僕は泣きたかつたけれど、泣くと笑はれるから我慢してゐたんです。

だけれども口惜しかつた。僕は聞いて見やうと思ふんだ、お父様は金

貸なんですか。」

「お父様は金を貸してゐるんだ。」

「ぢやあ僕は……何だな。」

「何が何うしたと言ふんだ。」

「猶且金貸は悪いと思ひます。」

「其様な馬鹿な事があるものか。」

剛は平然として笑つた。

「お前は物の理屈が未だ能く解らないから、其様な事を言ふのだが、
レ能く聞けよ、金貸といふものは決してお前の思ふやうな悪いものでは
ありません。夫は世の中では人にも金を貸して後で酷い事を爲る
と言ふ者もあるけれども、それは借方方で返す事が出来ないから、其
様な悪口を言ふのじや。金貸といふものは人に恩を施してやるので、
金が無ければ其人が困る。ナ困るだらう。」
と念を押して、

「其困る時に貸してやるのだから、是は恩を施してやるのではないか、
而して何時までに返してくれと言ふ約束を爲る。お金といふものは貴
いものだから、誰でも人に與るといふ事は出来ません。其だから返し
てもらふ。其時には此方から取に行くのだ。可いか、取に行つても返
さなければ先方が悪いのだ。何うだ此理窟が解つたか。」

「ぢやあ恩を施してやるんですね。
登は訝しさに尋ねる。

「然うとも、人の困るのを救うてやるのだ。詰り恩を施してやるのでは
ないか。」

「其ては悪い事ではないのですね。」

「何の、決して悪い事では無い。其を悪く言ふ奴は人の金を借りて返せな
い奴なのだから、恩を受ながら禮を爲ないのも同じ事だ、其様な奴の
方が餘程悪いのだ。」

剛は煙草を煙らして、折々帳面を覗いてゐる。

「何故皆は彼様事を言ふのかしら。」

段々に疑念が晴れて、今では常の通り元氣の好い登に復つた彼は、最後
に此事を言出して返答を求めたのである。

「何故皆が悪く言ふ？」

此方は煙草の吹殻を叩いて、

「其はち前の友達は子供だから何にも知らんだ、先生は其様事を言やあしませ。」

登は黙つて頷いた。

「それ見ろ、だから能く考へても解る。何うせ喧嘩を爲て弱い者を泣かせるやうな子は學問だつて出来やしまし。」

「倉田は去年落第したんです。」

「何れ其様な奴の言ふ事だ。何とても言はして置け。碌な者に成りはしない。而してお前は悪い奴とは遊ばんやうに爲なければ可けんぞ。」

「ぢやあ安心した。」

不意に嬉しさを言つて登は立揚り、スタク／＼室の外へ出ながら、

「僕は最早極りが悪くは無いだ。」

四

其から一週間程過ぎての事。登の通學する學校の校長から國枝剛に面談した旨の親書が來たので、何用かは知らぬが、兎に角剛は夕刻から校長の自宅へ出向いた。

登の母は甚く心配して、愛兒の身の上の間違が無いやうにと偏に夫の左右を待つてゐると、纏て夜に入つてから剛は散散の不機嫌で歸つて來た。

「お茂、登……登は何處へ行つた。」

「唯今石川と二人で通まで買物に參りました。何か貴方彼の身に就て間違でもあつたのでございませうか。」

母親は氣が氣で無い。

「何うも怪しからん事だ、買物に行つたのかいフォーム。」

と深く考へ込んで、腰から煙草入を抜取る。

「何か心配な事でも起つたのでございませうか。」

「お茂俺は今日顔から火が出るやうな思を爲たよ。」

「登が他人の物にでも手を付けましたのですか。」
 「然うては無いがの。何と言つたら可いか、實に呆れ返つたものだて。」
 剛は苦々しさうに煙草を喫んで、其まゝ熱と案じ入るのであつた。
 「何う爲たのですか、貴方も疾くお聞せなすつて下さいませんか……
 私だつて心配でなりません。」

お茂は取散した縫物を傍に押遣つて、直と火鉢の方へ寄る。
 「それがな。今日ほど耻入つた事は無い。」

「ですから何ても耻入なすつたのですか、其を仰有つて下さい。」
 「登は通まで行つたのか。」

「然うてございます。」　　お茂は焦躁して答へた。

「然うか、躡つて來たら言はなければ成らん。實は斯ういふ譯なのだ。」
 又煙草を煙らして、吹殻をトント火鉢の縁で叩き、

「今日校長の家へ行くと、先づ種々と登の噂よ。年に似合はず學問も出

来る、品行もよし、校長も大きに褒めてゐるのだ。」

「へー。」　　氣も無し返事。

「同じ級でも彼位に出来るのは餘り無いさうだ、殊に肥體が大相良いの
 て……。」

「其では褒められたのでござりますね。」

「マア然うさ。校長は前途多望だと言つて喜んでゐてくれるのだ。」

「其て貴方が耻入つてゐらしたのでござりますか。」

「否其は又違ふ。何うも子供といふものは油断の出来んもんだ。」

「其ては他人様の物を、欲しう……。」

「馬鹿を言ひなさい。お前は又慌て騒いで何の事だ。能く話の終まで聞
 いてから口を出しなさい。」

「心配でなりませんもの。」

「決して心配な事は無いよ。安心してゐなさいと言ふに。」

「決して心配な事は無いよ。安心してゐなさいと言ふに。」

何を爲るかと思ふと剛は机の前へ行つて、例の通り帳簿を擴げだしたの
で手の附けやうも無くお茂は黙つてゐると、少時経つて、

「お茂、俺は實に弱つたよ。」

「然様ですか。」　　今度は最う冷淡に答へる。

「上の空に聞いてゐられては話す効も無いといふものだ。」

「ですが何でも困りだか話の筋を少しも仰有らなものですもの、御返事
の仕やうがありません。」

「然うだ……登が學校でな。」

「登が？」

「貧乏の子を捉へては、金を借りると勧めたさうだ。」

「ハーエ、何うして彼が又其様な事を言ふのでしやう。」

「サア何うして言ふか、俺にも解らん。而して俺の家へ来れば何程でも
金を貸すから、何でも貸りろと説いて廻るといふのだ。先生が言はれ

るには、何うも學校へ来て其様な事を言はれては困るで、本人にも申
聞せたが、何うも子供の事であるから一向に譯も解らん様子である。

就ては此事は凡て貴方の家庭に關係するのであらうから、一應お話し
て置くといふのだ。」

「呆れて了ひますねえ。」　　お茂は開いた口も塞がらぬ。

「校長は俺の商業を知つてゐるから、深く立入つては言ひなざらないが、
家庭の教育といふ事に就いて種々説いて聞かせた。家庭といふのは畢
竟家内の取扱ひ法だ。此教育に依つて子供は何うても成る。何にも知
らない者の腦に始終悪い事を見せたり聞かせたり爲て置けば、自然に
子供が悪い方へ偏つて行く、家庭が善い事を見せて置けば其方へ引寄
せられて行くのだ。だから家庭の教育といふものは學校で讀書を教へ
るよりも大事だと、永い間説かれたが、俺は實に閉口したよ。」
「何故又彼の子は其様な事を言つたのでしやうねえ。」

「其が何うも解らない。校長は其處が即ち家庭教育だと言はれたが、然う聞くと此方も耳が痛い。尤も俺の爲る事は悪い事では無いが。」
と強て自分を勵して、

「けれども他人に言はせると兎や角理屈を附けるからな。何にしても彼奴が歸つたら一つ叱つて置かなければなるまいよ。子供なんといふものは何處へ行つて何を喋るか知れた事ぢやあない。」
と有繁に額の汗を拭いて、剛は心苦しうに呟いたのである。

五

「ア、僕は眞實に足勞れて了つて。」

大きな聲で獨語しながら、登は何にも知らずに外から歸つて來た。片手に帽子を持つて、左の手を帶の間へ挟みながら束々と室へ入つて、敷居の前で兩膝をドンと突くと、

「唯今！」

尻揚りに挨拶して、纏て帽子を其處へ置いたまゝ出て行かうと爲る。剛は其と見るより、

「登、何處へ行く。」

「書生部屋へ。」

「待て〜。お父様は少しお前に聞く事があるから。」

「僕に？」

と目を丸くして立返り

「試験の點ですか、修身が甲で、習字が……。」

「其様な事ではなす。」

「登さん、丁とも座んなさすよ。御用だから。」

母親が傍から指圖を爲るので、不承々に睨り、父の面を見揚げてゐる。

「お前は此頃先生に叱られた事はありは爲ないか。」

「叱られた事ですか。」 怪訝な顔。

「其てはな。お前は學校で生徒にお金を借りろと言つた事があるだらう。」

「お金を……ア、言ひました。」

「言ひました？」 父は餘無造作な返事に驚いて叫んだ。

「僕は三浦の家が貧乏だから、無困るだらうと思つて然う言つてやつたんです。三浦は家へ話して借に來ると言つてゐましたよ。」

「呆れた奴だ。」 剛はお茂と顔を見合せて苦笑ひを爲る。

「何故です。」

「何故も何もあつたものか、お父様は其事で今日學校へ呼ばれて校長に叱られたのだ。」

「叱られたのですか。」

「今度は登の方が呆れて、」

「嘘ばつかり、ねえ夫は嘘でしよう。僕は夫から先日喧嘩した倉田だの」

「なんかに然う言つたら。皆僕の言ふ事を肯かないで、猶且金貸々々つて言ふから、最早構はずに放つて置いた。彼様な奴は解りませぬね。」

「是待て。」

剛は描へかねて、

「何故お前は其様な白痴だらう。學校なんぞへ行つて其様な事を言ふ奴があるか。」

「然し。」

「コン聞け、お父様は其事で今日散々耻を搔いたのだぞ。」

「僕は白痴ではありませぬ。」

全然理由が解らぬから、登は更に感じが無いのである。父親は手を拱いて、

「お茂何うしたものだらうな。お前何とか言つて聞かしてくれ。」

「登や。」 母親は傍へ來て、

「お前能く物事には氣を着けて口を利かなければなりませんよ。家の父様はお金をお貸しなさるなんて、其様な事を言ふものではありません。其も可いけれどもお前は誰とかさんにお金を借りるとかお言ひなすつたさうだ。其様な事が校長さんに知れたので、今日はお父様が呼出されて、家庭の教育が悪いと大相叱られておいでなすつたのだよ。皆お前さんが言つたからです。其だから能くお父様に謝罪を爲さう。」

「御免なさい。」

登は手を突いたが、聴て少し考へて、

「僕は少し變だと思ふな。僕は解らないな。」

突然言出したので、母親は膽を潰した。

「お母様なんぞは知らないのてしやう。金貸といふものは決して悪らものてなすつてです。」

「夫は悪い事はありません。」

「然うてしやう人の困つてゐるのを救つてやるんですもの、恩を施してやるのは善い事ですよ。衆人は解らないから種々な事を言ふけれども、夫は倉田のやうな落第生なんです。ねえお父様然うてすね。」

「然うだとも。」 父親は爲う事なしに頷づいた。

「先生だつて然う言ひました。人を救ふのは善い事だつて、其だから自分の出来るだけは友達やなんかに親切を盡すものですつて。だから僕は貧乏な子にお金を貸したら恥度可からうと思ふんです、喜びますよ。其は三浦なんか大變困つてゐるんですつてね。」

氣の毒さうに顔を壓めて、

「お母さんが死んで了つて、お父様が病氣に成つてゐるだつて、姉様と二人限だもんだから、昨日から學校を休んでゐますよ。僕は毎日見舞に行つてやるんだけれど、家と言つたら其は穢いのです。狭い長屋で、座敷は二しか無いんだけれど、其處にお父様だの、姉さんだの、三浦

だの皆一緒に固つてゐるんだもの、僕が行くと坐る處が無い位です。其でも見舞に行くと思ひますよ。其だから子供は學校を退げられな
 いて、お父様が何時でも然う言ひます。然し月謝を出すのも大變困
 るらしいんでしやう、だから僕は彼の家やうな困つた者を救ふのは
 善い事だと思ふ。實際お金があつたら夜具を買ふだらうし、其から姉
 さんの着類も買ふだらうし、三浦も學校へ行けます。僕は家のお父様
 に頼んでお金を貸して與りたいと思ふんだ。貸して呉れましやう。恩
 を施すんだから。」

両親は登の話に引込まれて黙つて聞いてゐるのであつた。

「エ、夫はさつと喜びます。唯見舞に行つてさへ彼様に嬉しがるんです
 もの。夫から未だ僕が貸して與りたいと思ふのがあります。其は學校
 の生徒ではないけれども、表町の車屋です。彼處の老爺さんは先日ま
 て車を曳いてゐたのですが、最早年を取つたものだから、何うしても

車は曳けないですつて、それだもんだから此頃では直脇の酒屋の子を
 預つて、毎日守を爲てゐるんです。毎日學校の歸途には僕と話を爲や
 うと思つて角に待つてゐるもの、先日然う言つてゐましたつけ、
 體が利かないから、せめてお金があつたら通つて駄菓子屋でも爲て見
 たいつて。彼の老爺さんにも何うか貸してやりたいんだがなあ。」

「登さん。」 母親は氣が着いて話を止め、夫の顔色を窺ふと、一向

に先刻の勢も失せて、何にも言はずに目を閉ぢてゐる。

登は未だ喋り足りないと思へて、

「ですけれど先生は何故其様な事を父様に言はれただらう悪い事なら

叱つたつて可いけれど……。」

と少し考へて、

「ちやあ明日行つたら聞いて見やう。」

「最早聞いて見なくつても宜し。」

父は此時初めて口を入れた。

「お前の言ふ事は全然解つた。其てはお前の貸して與らうと思ふところへ、お父様のお金を持つて行つてやれ。」

「ぢやあ可いんですか。」 登は心から嬉しそうに叫んだ。

「而してな。貸してやるよりも、唯與つた方が餘計可いのだから、品物でも何でも買つて持つて行つてやれ。」

「僕は實に貴方にお禮を言ひます。」

「お茂—」

剛は妻を呼んで、

「俺は誤つてゐた、今子供に言はれて實に返す言も無い。是ては明日から商賣替を爲すばなるまいよ。此神様のやうな奴の爲に。」

國枝の家風はガラリと變つた。お茂も下女も急に身が軽く成つたやうに。

立働、取分けて書生の石川は登を見る度に、

「貴方は實に天使だ。」

と言つては引抱えたが、彼は感激の餘りに其晩一夜寝すにかゝつて。此顛末を手紙に認め、蝦蟇口の底を掃いて、二三の親友に知らせてやつた。

子の思終

影法師傳

烟燭。人呼んで影法師といふ、何處の産なるを知らず。鼻あれども目なく、口あれども聲なく、色は黒々として形いと鈍なり。其性夜分を愛て、好んで人のうしろに隠る。之を追へば走りて捕ふべからず、鞭てば軽くして煙の如し。こゝに此法師の生立ちを尋ぬるに、むかし三輪の御神假初に人の子と契り給ひし折、忍ぶ夜毎の末社どもさへ御供には立たせず、いて其頃はだうろく神と名にや呼びけむ、此僧一人を秘に召連れ給ひけるより、さてこそ人の間にも立交らひて、今の世までも長らへけるなり。神の通力はもとより廣大にて在しければ、花下月前の扮装にも、機に臨み折に觸れてさまゝに姿をやつし給へるにぞ、彼も何時しか其術を覺え、諸の物皆形に隨ひて、思ひのまゝに身を變するにいたれり。

然れば人は一概に此僧魔性の者なりといひおとすめれど、神さへ蛇躰に在せし世なれば、彼も御山の片端に住める木の精石の怪にやありけむ、今は委しく知るべからず。やがて墨染の衣に姿を改めつる後は、雲を起し風を呼ぶ日來の行を捨て、専ら許由が名實の境を悟り、超然として利害の外に遊びぬ。然れど有繋に戀しき昔の忍ばるゝ折もありけむ、興がるみやび男と共に東五條の月に彷徨ひては、我身一つの變りたる春を歎き、又或時は邯鄲の旅籠に髯白き遊子が膝と一つ寝の夜すがらを啣ちなどして、はかなき風流の道づれとはなりにけり。たまゝ女子供の夜歩きに附纏ひ、衣被せたる棕櫚箆に乘移りて人の膽を潰さしむるは、昔の悪戯を忘れぬにて、師の身に引添へば虎の威を借る七尺の尻尾を踏れず、八兵衛が晩酌の傍に侍れば、影辨慶の薙刀に家主を驚かすをいつち面白の所業とすらむ。唯あさましきは添乳の枕屏風に舌出三番叟を舞ひ、年わすれの酒に裸踊の對手となりて壁に狂態を盡す事もあれど、強にそを

苦々しとも思はずあらん。日も照れよ、雨も降れよと、他のまに
 己は取留めたる心も無ければ、時に獨者の夜伽となりて、一つ鍋の飯を
 つゝさ合ふ親切はありても、竟に影とも談合する事を聞かず、曉の鐘音
 窓の霜に響き、燈の光も漸く薄らぐ程に、むく／＼と炬燵に這込みて、
 桁はしる鼠の騒ぎにも目を醒さず、効性なく消果つる身を、あはれと見
 る人もあらざりけり。

影法師傳終

波 誰 時

年の瀬も十二月の柵にかゝると、人の心も自と騒立つて、繰返し同じ事
 する命の關を、越ゆるも辛い夜毎毎の其寒さ、都大路を吹わたる北風
 は真向から砂を吹付けて、空高い電柱を鳴らすのが、宛然身を切るやう
 な音を立てゝゐる。

歳暮賣出し、見切物大安賣などの看板が到るところの店頭に掲げられ、
 旗や紅提灯が軒を彩る此頃を見込んでの附景氣。その賑ひにつれて人の
 往來も織るやうな下町の、此處は神田神保町の唯或る角から一人飄然と
 現れた壯者がある。年齢は三十前後、脊丈のスラリとした、瘦形な男で、
 人品も卑しからぬ方であるが、服装は垢染みた銘仙の布子に、葱の枯葉
 のやうな縮緬の帯を締め、袖の袖口の切れた三つ紋の羽織を着て、縁の

磨れて形の崩れた中折帽子を飾氣も無く引冠り、細い寒竹の洋杖を突ながら、格別用事も無さうな風で雜誌店の前に立塞がり、數ある書籍の題を片端から讀んでゐたが、

「フム、日本倫理學史」

と獨語を云つて、フイと其處を立出た。

丁度午後四時の頃で、短い冬の日是最早暮れかゝる空である。二三日前より雪を持つて曇つた上に、何處となく寒い風が地を骨めて行くさへ、何時も夕方の物悲しさ。

彼は片手を懷中に、思ふさま左の肩を擡して、向側の名刺屋の前に行かうとしたが、忽ち往來の人と衝突るばかりに磨違つたので、何の氣も無く顔を擡げると、

「オヤ貴方は……もし山西様ではございませんか。」
突として艶めく聲を、此敵衣の人は訝しげに振返つた。

「山西さんではございませんか。」

「あゝ、解りました、貴方は三浦の。」

山西は徐ろに帽子に手を懸けたまゝ、また熱と對手の顔を打目成つてゐる。

對手は年の頃廿二三にも成らうか、丸鬚の、色の白い、目は細い方だがそれが滴るばかりに愛嬌を持つた婦人で、風通の品の好い二枚小袖に、黒縮緬の紋付の羽織、今流行の縮緬に縫の取つてある肩掛を軽く投げかけ、風呂敷包を持つた女中を随へてゐるのであつた。

「然うでしたな、私を御存知ならば、貴方は多分三浦のお金さんでしたな。」

山西はジロく眺めながら云つた。

「はい、久しくお目にかかりませんで、人違ひかと存じましたが、餘り能く似てゐらつしやるので一寸伺つて見ました。矢張思つた通りで

「ございましたね。」

「然様！」

「眞實にお久しぶりでございましたこと。」

女は人通りを避けて、溝の傍へ寄りながら、

「でも貴方も能く見覺がありましたのねえ。」

「然うでしたな。」

暮の日数は知らぬかとばかり、男は冷淡に左右を顧る。

「其後は一向に存じませんが、叔母さんは相變らずお達者ですか。」

「母ですか……母は此春歿しました。」

「え、お亡りなさいましたの、それはまあ、少しも知りませんで、彼様

なに御丈夫な方がねえ……御病氣は何てでございます。」

「矢張老病ですな。」

「たしか今年は六十八にお成りなすつたと思ひますが。」

「然うです。」

とばかり寒竹を矯はしてゐる。

「疾く伺ひましたらば切めて御見舞にも出ましたものを、誠に残念な事

を致しました。」

「母も折々貴方の事を云うてゐましたよ。」

「然様でございましたか、稚い時には種々御厄介にはかりなりまして、

私も早く親に別れましたものですから、實は直實の母のやうに思つ

て居りました。」

「近頃は何處におゐてすな。」

下谷御徒士町に居ます、二丁目〇番地でございますから、彼方を御通

行に成りました折は何うぞ立寄り下さいまし。」

「又伺ふ事があるかも知れませんが。」

「貴方の御住宅は？」

「私ですか、私の家を申しあげた處で、御光来下さるやうな事があると

「反て迷惑です。膝も容れられないやうな貧家ですからな。」
山西は獨悄然として笑つた。

「ではございませうが……又郵便でも差上るやうな事がありますよ
可けませんから、御不都合でなければ伺つて参りませう。」
女は顔を赤らめながら云ふ。

「ですか。」　と少し考へて「ぢやあ云ひませう。實は此仲猿樂
町三丁目〇番地漆田といふ家、商賣は煙草屋です。其二階を借て夫婦
漸く其日を送つて居るです。」

「あや、何ですか取紛れて居りましたが、奥様もと變りはございません
か。」

「難有う、幸ひに壯健です。」

「未だお子さんは御出来にはなりませんのですか。」

「一人有りましたが、是も今年の夏失ひました。」

「それは〜重ねがさね飛んだ事でございませぬねえ。」

女は側隠の情に堪へかねて、獨眉を懸めるのであつた。

「否、斯様な貧苦の世帯に子供の無いのは結句僥倖かも知れませぬ。」

「でも貴方……。」

「まあ〜其様な事をお話爲てゐても仕方が無い。時に貴方は御用もお
ありなさるでしやう。」

「はい別に急ぎます事もございませぬ。」

「御用があるならお構ひなくお出なさい、私は急ぐから是で御別れ申
します。」

と山西は又四邊を顧た。

「誠に不意にも目にかゝりまして、何からお話を致して可いやら解りま
せん。何れ其うち又寛りお目にかゝりまして。」

「其様な機もあるでしやう。」

「奥様には未だ一度も目にかかりませんが、何うぞよろしう仰有つて下さいますし。」

「承知しました。貴方も御大事に成さう。」

「ありがたうございます。何れ春にも成りましたら、是非伺ひます。」

「いや其の光來下さるのが困却します……が強てお断りませすのでは

ないから。又お次手もあつたらお出なさい。其代り驚かんやうに先以

て用心してあらせてなさい。」

「何を驚くのでございませす。」

「貴方なんぞには想像の出来ん境涯だから。まあ何でも可い。ぢやあ

是で別れませすしやう。」

「然様でございませすか、ては失禮を致します。お忙しい處をお引留申し

ましてすみませせん。」

「御同様です。」

軽く會釋して行き過ぎる男の後姿を見返りがちに、女は反對の方を指して歩いたが、昔に變る稚馴の今の氣の毒な風を見て、そとろ涙組ま

れる心弱る。

昔向同士の二つ町に育つた時には、山西と云へば誰知らぬ者も無い素封

家で、母親の手一つに育てられるその跡取を、子供心にも皆羨しがつ

たものを。今では變る身の上に、彼の見をばらしい姿といひ、貧の爲め

に僻らしい言まで、變れば變るものではある。まして自分とは一時親々

が許した許婚であつたが、其後の境遇が双方ともに變るにつれ、五六年

來音信もほとく絶へて了つた。此方も續く不幸に今では妻あがりの奥

様と人には云はれてるれど、未だ此方が運の好いのであつたかと、他の

姿風を見るにつけ、女は未だしも自分が頼もしいのである。

軒の木がらし吹荒れて、寒い燈がちらつく頃、山西は飄然として家へ歸